

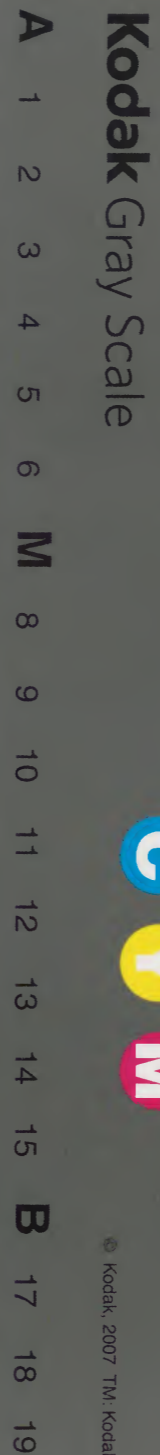
武家名目抄土代

衣服部三四五

和書門類		
二七〇九四號	九二函	七冊

内閣文庫		
二七〇九四號	七冊	一五三函

内閣文庫	
番號	和 27094
冊數	7 (1)
函號	153 280



武家名目抄

稿箋三部

衣服部

三五

四

白綾鉢巻	白練袴鉢巻	白鉢巻	白練袴鉢巻	白練袴鉢巻
水鉢巻	半鉢巻	濃紅鉢巻	濃紅鉢巻	濃紅鉢巻
押入袴帽	鉢巻	袴頭	袴頭	袴頭
止折袴帽子	總塗	五折袴	五折袴	五折袴
袴高帽子	梨打高帽子	列高	列高	列高
袴高帽子	袴高帽子	袴高帽子	袴高帽子	袴高帽子

篆

海峽子目林士外

大朝時三四

武家名目抄稿箋三冊

衣部三目錄

倭為帽子

梨打為帽子

引立為帽子

上折為帽子

緣塗

左折緣塗

押入為帽子

鉢卷

結頭

單鉢卷

本鉢卷

半鉢卷

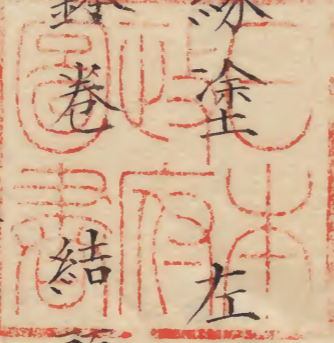
濃紅鉢卷

薄紅梅鉢卷

白綾鉢卷

白練緯鉢卷

白鉢卷



明治十二年

衣服部

衣服部三

三

白鳥袴

白鳥袴

白袴

白鳥袴

白鳥袴

白袴

白袴

白鳥袴

白鳥袴

白袴

白袴

白鳥袴

白鳥袴

白袴

白袴

白鳥袴

白鳥袴

白袴

白袴

武家名目抄第三冊

衣服部三

接鳥帽子

長門本平家物籠スノカタ保川合戦条云福衣

のまろひ部てきく華威のよびひき

をみゑかひき入るうけあるむま

にのうて河をさよあゆませいそいで

河をさよあゆませいそいで

越中前日盛俊より末子ありて國石山住

僧悪土修金運と名のりて入りたり

源平盛衰記割注縮笠合戦條云義明懸出テ

、最後ノ軍レテ見セ奉ムトテ白キ直

垂ノ袖セハキニ萎モミ鳥帽子ヲ引立テハ

林云二

按接為帽子ハ兜乃下ニ着ル料アリ

左末をぬりかへりて左ハ右ニ製した

るその之次ニ出せし梨子打訂立為

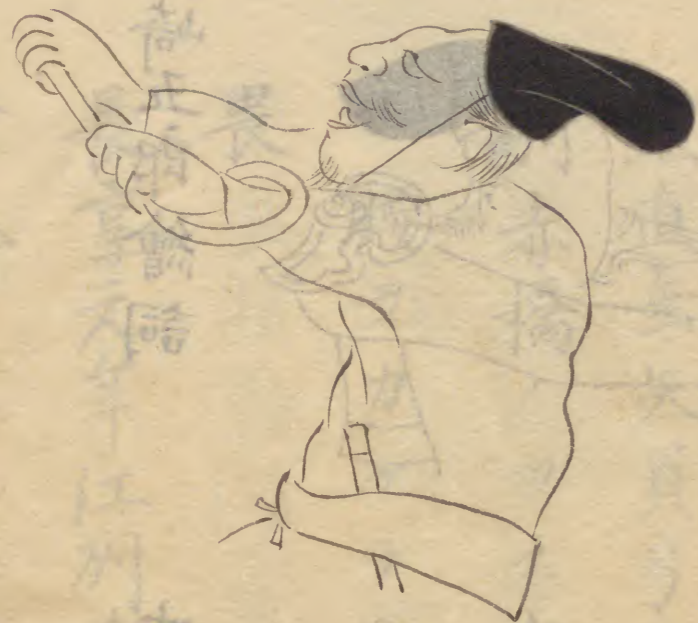
帽子昔々皆この接為帽子なり故案

捨要捨マキ立為帽子柳條等或ハモミ

為帽子氏云と以厚

梨打為帽子

後三年合戰繪詞

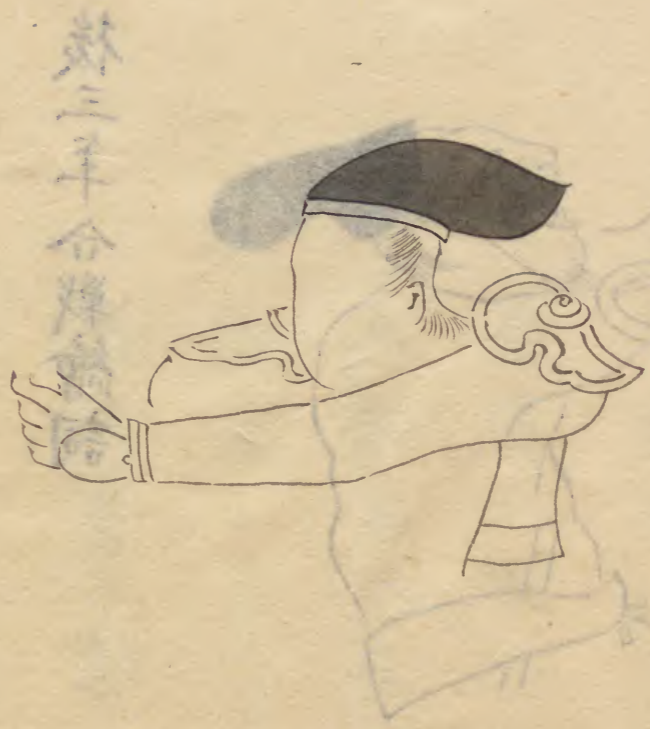


十人計分
十界圖

Vertical columns of faint handwritten text on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

竹崎五郎繪詞

十界圖



蘇三平合繪詞

梨打為帽子

鎌倉年中行事云社參之時過固小侍所

鎧直垂矢負弓ヲ持ナシハナリ為帽子廿

騎赤橋ノツメ左右ノ置石ノ際ニ唐櫃

ニ腰ヲカケテ公方様御透ノ時ヲモテ

畏越圖繪詞一外書云各年泉吉刺云

長享元年江州清和殿記云雜色ノ男共

十人計有リテ其ノ一ニ是キ布在垂

こくへしちを言く所て強刀研
也

賀越鬪諍記一揆等攻落平泉寺條云或

ハ蝙蝠ノ尾ノ額金梨地打烏帽子半ホ

ウアテ萌黄系綴ノ具足ヲ着蟻螂カ谷

ヲ横夕へ云こ

共一筆紙云平家三万石余騎月卿雲

客あひのころは只存出する有る

為。此。志。く。ん。ハ。あ。き。此。射。子

ハ。お。ら。一。強。一。と。さ。め。き。日。た。何。を。見

元。才。也。強。ハ

兵具雜記云梨木為帽子之事

是地用ハ軍陣の時カ益然此ハ事也
其時為何ハ此代々用意多クハ返カ
里中ハ口傳耳是を為るハ兵衛智三位
也^五人ぬり此事能心持命ハ

按梨打鳥帽子ハ地を中まらカク張

温古堂前本ニ(六)カカラぬ根ニあさくとぬ
打梨子打といふ事(廿一)字ナシ

此漢も亦まらぬ格々あさく

とぬるハ梨子打といふなり梨子ハ

山字訓を假りしる此もまてな厚ハ打

昔といふつきをヤハナ此語ハ籠りまおの川

者れしること伊勢貞丈のいひたり今按

其に承元二年十二月亦五日三中記

昔人衣後打梨今人装束如本といふこと

君元た台如本ハ糊を亦まら張る木の

正くなり錢いふ事其ハ對ハ打梨を

いハ婦々まらに糊を亦まら張

する正と知るハ真丈の記いすれハ能

是切用ハ軍陣の時カ筈然此ハ事
其時為何ハ此代ハ用意多クハ返カ
里中ハ口借是を忘ルハ兵衛智三位
也^五有んぬリ此事能心付向ハ

按梨お烏帽子ハ地を中まふカ張
リテ裏此深も亦まふぬ格々あふ
とぬる前梨子おといふなり梨子ハ
字訓を假リする此もまてな厚く打

昔といふときをヤハナ此類ハ籠リまおの川
者れすること伊勢貞丈のいひたり今按
其るに承元二年十二月五日三中記
昔人衣後打梨今人装束如本といふこと
君元たる如本ハ糊を亦まふ張る木の
よくならず成りぬる事ハ對ハ打梨を
いハ婦くさまうに糊をやまうか張
する事と知るハ——貞丈の説いすれも能

受多り

引立為帽子

源平盛衰記條云行家ハヌイモノノ紐

ノ直垂ニ同毛ノ曹引立為帽子ヲ着テ

郎從三人ヲ相具セリ

割注 十一射扇條云平家ノ侍ニ伊賀平内

衛門尉カ弟ニ十郎兵衛尉家負ト云

者アリ餘ノ面白サニヤ感ニ不堪シテ

温古堂考本三平内光衛
門トアリ尉ノ字ナモ何カ
是カ系ノ、在シ置

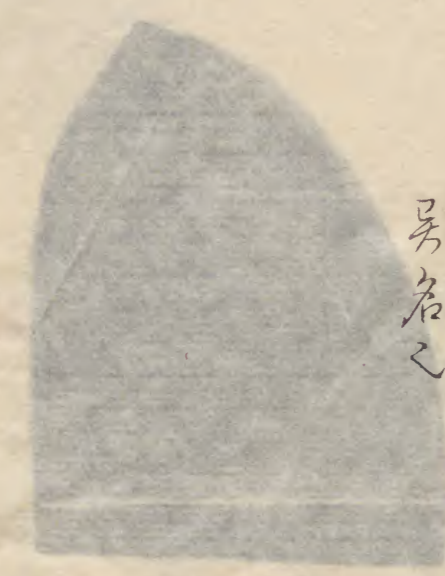
黒糸威ノ鎧ニ甲ヲハ不着引立烏帽子

ニ長ナキナク笏ヲ以テ扇ノ散タル所ニテ水車

ヲマ口ニ一時舞ニソ立タリケル

兵具雜記云引立烏帽子但厚くぬりとハあや
まうへぬりと云存

塗ト云存之
号名之



本報

多し

引立為帽子

源平盛衰記條云行家ハヌイモノ、紺ノ直垂ニ同毛ノ曹引立為帽子ヲ着テ、郎從三人ヲ相具セリ、又割注与一射扇條云平家ノ侍ニ伊賀平内左衛門尉カ弟ニ十郎兵衛尉家負ト云者アリ餘ノ面白サニヤ感ニ不堪シテ

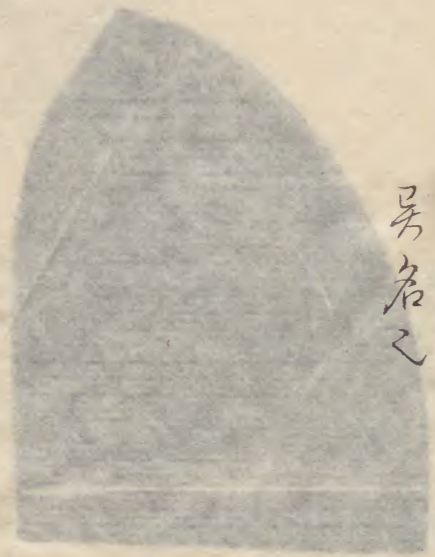
黒糸威ノ鎧ニ甲ヲハ不着引立烏帽子

長ナキナク笏ヲ以テ扇ノ散タル所ニテ水車

ヲマ口ニ一時舞ニソ立タリケル

兵具雜記云引立烏帽子但厚くぬりとハあや

重ト云布之
号名之



本躰



亦ぬ孝之付常此為帽子此子其解里也上(一)到
立てきやん為帽子乃之に到立て極(一)白
布をひく(一)付に(一)中程を極(一)初(一)空解
り(一)も(一)川(一)を(一)も(一)是(一)我(一)旗(一)指(一)も(一)名

(一)其(一)外(一)軍(一)勢(一)も(一)用(一)地(一)為(一)帽子(一)此(一)大(一)さ(一)云
此(一)一(一)為(一)帽子(一)乃(一)手(一)を(一)結(一)く(一)を(一)け(一)つ(一)
て(一)う(一)ら(一)う(一)か(一)き(一)ぬ(一)や(一)に(一)さ(一)す(一)一(一)公
家(一)此(一)口(一)傳(一)ハ(一)中(一)將(一)乃(一)信(一)用(一)也

按(一)云(一)雜(一)記(一)ハ(一)厚(一)ぬ(一)と(一)云(一)ハ(一)あ(一)や(一)ま(一)り(一)之(一)云(一)ハ
ハ(一)か(一)こ(一)う(一)を(一)い(一)ひ(一)さ(一)す(一)之(一)厚(一)ぬ(一)を(一)厚(一)ん(一)ぬ(一)り(一)也

ふ(一)と(一)云(一)厚(一)ぬ(一)と(一)云(一)ハ(一)あ(一)や(一)ま(一)り(一)之(一)云(一)ハ

ハ(一)か(一)こ(一)う(一)を(一)い(一)ひ(一)さ(一)す(一)之(一)厚(一)ぬ(一)を(一)厚(一)ん(一)ぬ(一)り(一)也

温(一)室(一)本(一)源(一)平(一)盛(一)衰(一)記(一)十(一)接(一)馬(一)帽(一)子(一)ノ(一)十(一)字(一)ナ(一)リ

鱗



亦ぬ李と付常此為帽子此子生解里也上(一)到
立てきやん為帽子乃之に到立て極(一)白
布をひく(一)付に(一)中程を極(一)白
り(一)も(一)川(一)と(一)た(一)む(一)ぬ(一)一(一)是(一)我(一)旗(一)指(一)も(一)名

(一)其(一)外(一)軍(一)勢(一)も(一)用(一)一(一)也(一)為(一)帽(一)子(一)此(一)大(一)さ(一)云
此(一)一(一)為(一)帽(一)子(一)乃(一)手(一)を(一)結(一)く(一)を(一)け(一)つ(一)
下(一)う(一)一(一)ろ(一)う(一)か(一)と(一)ぬ(一)や(一)に(一)さ(一)す(一)一(一)公
家(一)此(一)口(一)傳(一)二(一)中(一)羽(一)乃(一)信(一)用(一)也

按(一)云(一)名(一)雜(一)記(一)二(一)廣(一)う(一)ぬ(一)と(一)云(一)ふ(一)あ(一)や(一)ま(一)う(一)之(一)云(一)ひ
ハ(一)か(一)一(一)より(一)生(一)る(一)い(一)し(一)さ(一)の(一)廣(一)う(一)ぬ(一)と(一)云(一)ぬ(一)ん(一)ぬ(一)り(一)子
以(一)て(一)云(一)便(一)二(一)う(一)て(一)な(一)ま(一)さ(一)る(一)あ(一)れ(一)ハ(一)廣(一)う(一)ぬ(一)と(一)云(一)ひ
其(一)中(一)を(一)正(一)し(一)き(一)名(一)ハ(一)あ(一)る(一)有(一)れ(一)涼(一)平(一)威(一)衰(一)記(一)二(一)橋(一)為

帽子引立て落取柄、神是又判友物語と云
布引立て柄も云ふ所なく不きいれ存
一、あき越は向て心ゆくむつとひてといふ文
あり高帽子然あきを是もと柄高帽子存
布引立てと云はれ柄目を消んが存ありて引
立て高帽子の所なく一、生然結を以て神是と
たるをいひて之を引立て高帽子とて別と生
制ありてそのありては、以て志くを結つて上

上、引立て柄高帽子と云ふ疑ふ所、次、白布越
ありて引立て中程を結ひて生解を以て結
ありて、そのも図よりして、僅く生を以て知るも
と心得難きを書さる由之

且随随々り祀軍陣の書、一、画りぬ里にハ神是
るより見えたりされハ雜記此圖の通り心
緒のある相もあらう古画々たゆ結あり
るをらんて記す相見えたり又公家此傳

中将此位用といひ志をあやし記書さるるに殊
又うすふ之——公家にも引立爲帽子といふ
そのあつて公卿爲用ありしと所見あり
其文の考は平何ぞ中将に限りぬ也是へて其の
記を一家に説くも古書に於るまじきと多かり
書之又折爲帽子といふおを裁^載これと見らるる
ころをいふれを今淺しぬ

上折爲帽子

保元物語云基盛るち路のむの志を何ぞの物衣る
あさ起いとの程くうを物うしなるありしはと白
星のかりをせ若し切れ矢に二所後のちとち馬を
馬く見くうをそそる多かりと云

按伊勢貞文々武笠袴うを物うしなるありしは
嚙乃下りかきもそ若かりなううを物とハ互急御
しを物うて是を物り平めつるといひしはと
此説のそくは誰も志らるるきとたなきを基盛る

〆限りてかゝる志を以て手理りて今又意を
 味方に此を看入りては里初るめも是れ如杯
 として志する一種の爲帽子を爲せしこと其由後
 三年合戦絵詞としておきいふべき相あまき何
 〆之塔改ハ蓋形なるは爲帽子を折まき何
 〆絵巻物に及ん多る折居爲帽子とたる也

後三年合戦繪詞



後三年合戦繪詞
 〆新ハ蓋形なるは爲帽子を折まき何
 〆絵巻物に及ん多る折居爲帽子とたる也
 〆之塔改ハ蓋形なるは爲帽子を折まき何
 〆三年合戦絵詞としておきいふべき相あまき何
 〆味方に此を看入りては里初るめも是れ如杯
 〆として志する一種の爲帽子を爲せしこと其由後

縁塗

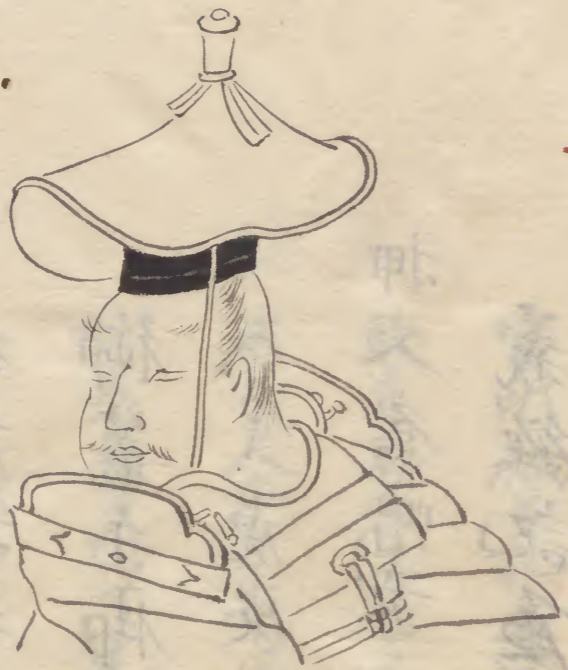
長享元年江州内勤望記云常徳院教様内勤望
之内出立事者内裕之赤地縁此相唐系乃内
程重垂之内縁塗之白綾之内腹巻之内腰物ハ系
後四節吉光也

鎌倉年中行事云正月朔日早朝ニ公方
様御行水メサレテ以後御手水ノヤク
人直出ニテ致出仕トキ足利ヨリマイ

ル御年男御手水ヲ椽輿ニ入テ御ヤウ
シ御手カケニ置テ御中居マテ持テ参
ル時役人請取御前ノ次ノ御座六間ニ
ヒカシムキニ置申時上臈様御持有テ
御カケアル也御陣之時ハ役人縁塗小
具足ニテ参リ直ニ懸ラル
軍陣閑書云軍陣ノ以テ愈々内勤望ノ
り也云々云々云々云々云々云々云々云々

後三年合戦繪詞

下



上



下
 古刀はひく矢あそく可急古用より本儀
 たり
 隨兵日記云。厚きぬ。皇の出陣の時。大ね又をば。つぎ
 ちと。さへ。一回。飾。光。哉。を。厚。き。也。

按この縁ぬりといふ。即前此列立。爲帽子。此。事。之
 木の爲帽子。ハ縁を漆。よ。て。さ。ら。し。と。ぬ。ら。か。故
 縁。を。き。爲。帽。子。に。お。く。と。縁。漆。と。い。ふ。云。便。々
 きて。厚。ん。ぬ。り。と。い。ふ。事。

足りぬ。知りぬ。を。足。ん。ぬ
 知んぬ。とも。不。例。なり

左折縁塗

鎌倉年中行事公方様御發向條云公方割注

様左折之御縁又リ金欄ノ御肩衣小袴

御籠手御腋拵御臑當御丹皮鑱御ヒツ

シキ虎皮云々

押入烏帽子

義経記厚いせん一此見物の条云々割注

も大く中にいさゝか一きり手の事を

法云よつそととさふらひよそ出まき

室町殿日記中中割注中割注向割注條割注古割注為割注り割注け割注一色兵衛右輔伊

駒重祓入道とて向きし禮多かくて揚州二日馬

持此是人の息を法々々中割注中割注押割注と割注知割注と割注河割注と割注上割注家

中義長三とて先割注軍割注無割注り割注あ割注と割注を割注れ割注を割注今割注度割注ハ割注さ割注と

有割注ん割注欲割注ち割注かく割注と割注先割注行割注カ割注と割注す割注弓割注張割注炮割注を割注う割注と割注せ割注よ割注油割注引割注

其割注る割注ち割注の割注者割注と割注て割注ち割注や割注い割注河割注と割注入割注る割注黒割注革割注と割注し割注ら割注る

ひ割注り割注急割注呼割注ひ割注つ割注あ割注つ割注て割注志割注ろ割注き割注解割注ぬ割注き割注乃割注一割注と割注せ割注河

く多きてすあゆまに志りと一の三尺二寸は方刀一尺
八寸はうちかつちきくそへかまうう 被治治のきくぬれ
る二寸八寸は尺大あきうちを拵拵よつてきくねもては矢属り
いふも志のきくあきと顔は陣をえわうう

鉢巻

三 随兵日記云厚くせき出陣の時大脇又へききく
ちときく厚く同をちゆききき厚き也まは是は色紅
同上帯は色も同あうまう一はききくと白をききく

あるまききのす法は人比路あまをて可因なり

四 軍陣聞書云鉢巻の事布うまう一はきき白を布う

ある之厚き長さ不定但赤も黒もはる

五 岳記雜記云梨打馬帽子の事略緒ある(ううは鉢巻

に付括あり

一 梅松論云大友す記あるはははとくむて親光は
場をて付同親光一前を十余人引廻く討死
大友八目は上を様さうむく切をぬりきり大事は

ありんハ神。是はく既をくけ樂と宗と親光の
改を持系と云ふ事此跡徳と申す一々此に
室町殿日記筑前守飯吉此城出張の条云志テ書り
陣よりハ孤と云々此より云々あり一うち急母一
左ちまさ一云々

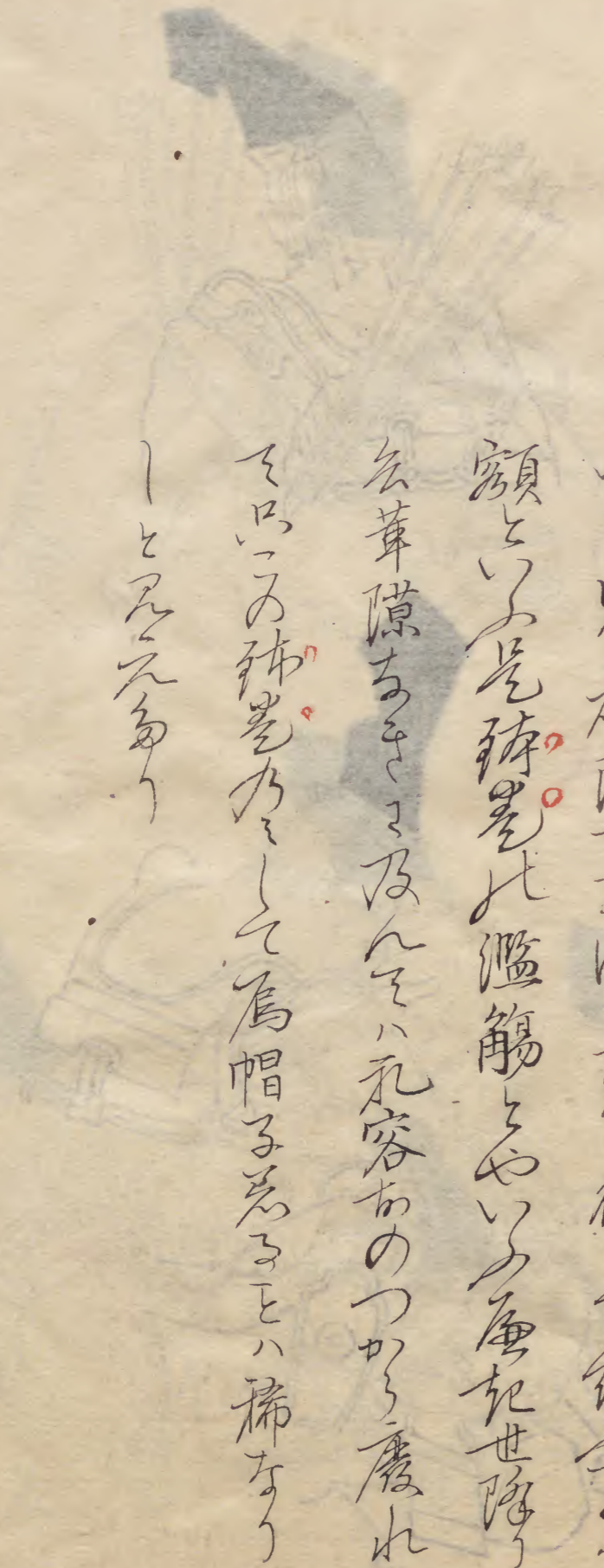
三下

甲陽軍鑑かくて敵此旗先みゆるとあり時法女房
達介信より小原丹後守才下徳金丸助六郎三人之氏助
六々元來より重丸名字は土屋相茂兄と云殘之四

十三人ハ勝頼公信勝公合于て必件左土屋殿才を
より射るるは欲多指あり無の者一もな一申す勝
頼公白き法衣此に云て神是と云され前後は左
刀うち也

二

大友貞慶記妙林一城持系云妙林地也一と云ん
おみのう一相織を忌小長刀を多一と云す東城中
を周回一と云すやと云す久々一と知法上御と云
下ありハ女房是にいつるまさありと云す一と云す



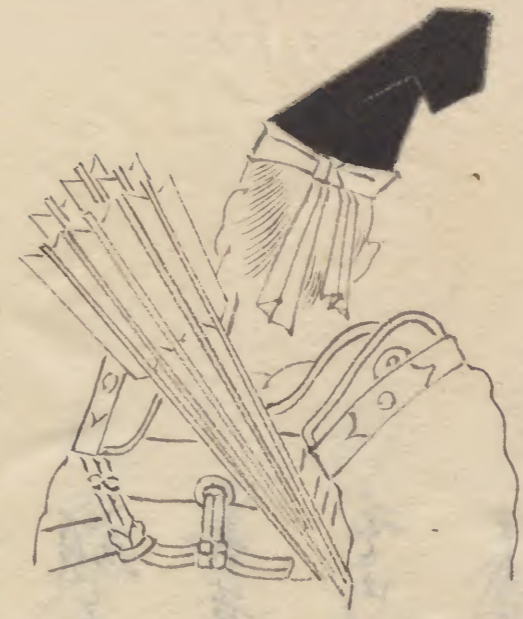
又結ひ既ともいふなり會集此日武友緋此緋を
 以て冠の儀際を引海とひその後之結ひを末
 額といふ是緋是此濫觴といふ處紀世際
 名華隙をきき及んそハ礼容おのつかう廢れ
 ても只この緋是乃て之為帽子忘るるとハ稀なり
 一と見え多う

古の海北出るものさうさあはさう妙林の付その
 六六按按古古代代のの礼礼容容をを考考へへるる風風俗俗をを甲甲胃胃此此時時

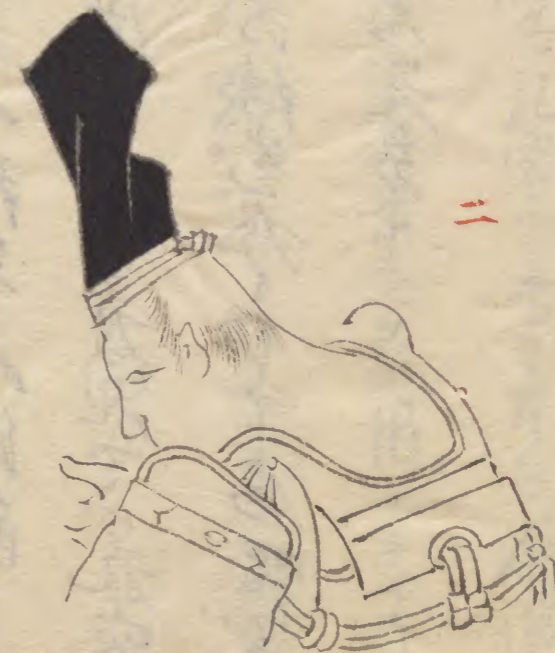
も烏帽子直垂を着用ししう烏帽子ハ甲をさ
 へさらんるにぬるかつめさなとと製し垂垂も
 岸乃よりハ法めそ四のくうをひきしう又烏帽
 子此後さうんる為う緋布此緋をも烏帽子此
 縁乃和を前より結ひ切りも又うしりる是
 結ひ解りせ垂垂も去るなり是を緋是といひ

後三年合戦繪詞

一



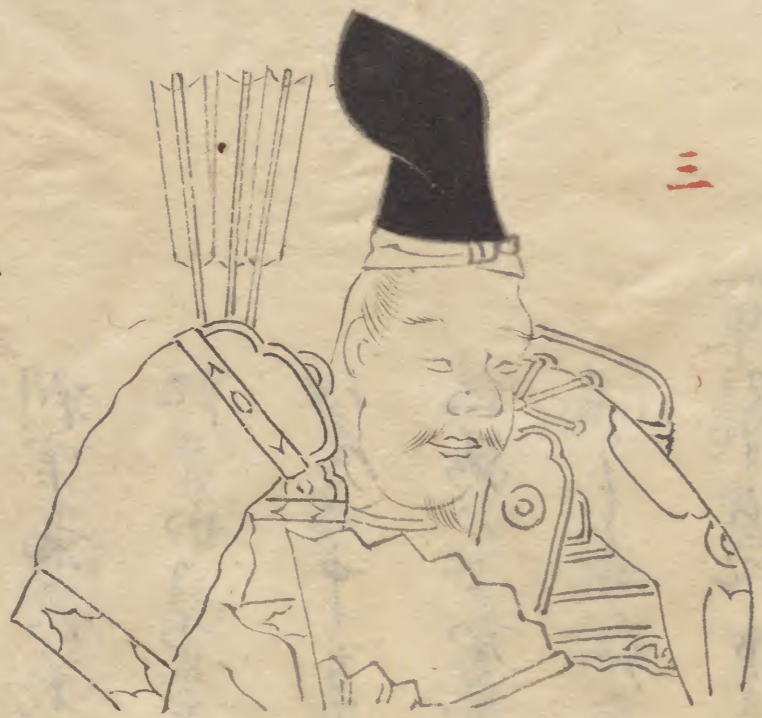
二



三



三



五



結頭

五

判官お徳義經吉野山之忍不條云辯交を始と云

にこのかり下まを寺中此さうさう城尻りまひりし

らん中もまを法法ををうちうち人此ひされ又

く徳いとあうこれ徳ひまうあううううううううう

にううううううううううううううううううううう

かしらにまをえあうううううううううううううう

吾々うううううううううううううううううううう

半按結頭といふも前条の辨是乃とあり

單鉢卷

玄具雜記云云と云と云と云と云と云と云と云と云

知りてあうはううううううううううううううう

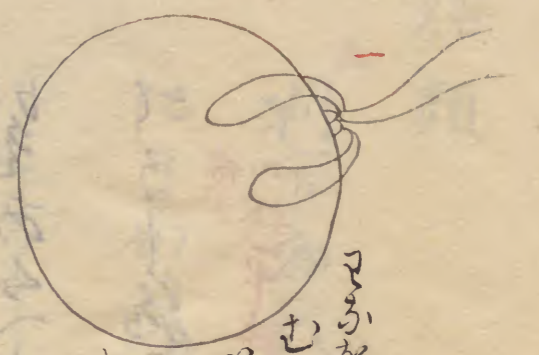
かきあううううううううううううううううううう

てうううううううううううううううううううう

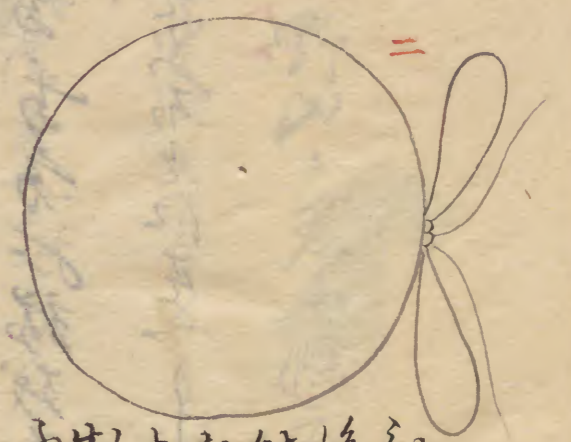
後、按單鉢卷云云此に入

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

此圖半鉢
卷ノ下ニ入
ルベシ



此のふたをへきき
むすめ
乃むき
てのち
かいり



此のふたの仕振
後々々々々々々々々々
能くかきとす
なり
上方へをさす
出をさす
小室

○ 按單鉢卷といふもの古書に云えり名目なる次此

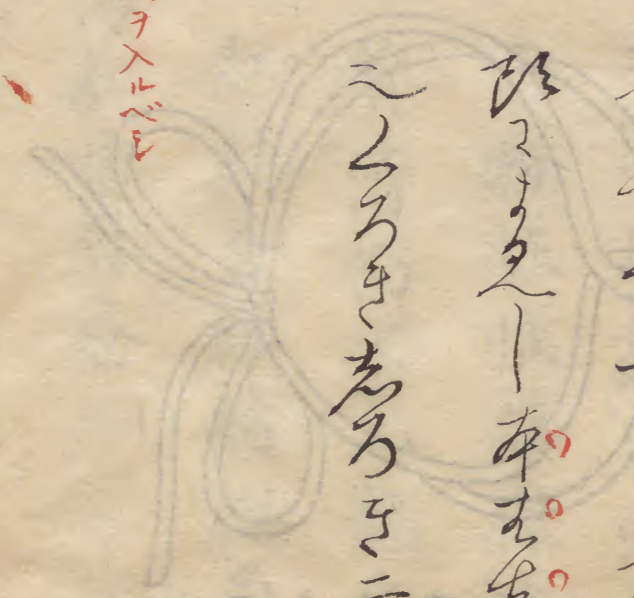
布鉢卷半鉢卷も亦同

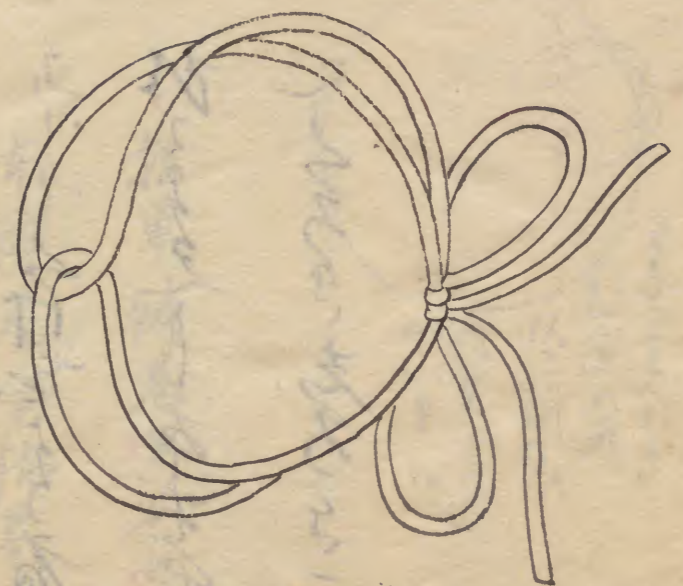
本鉢卷

半鉢卷

茶具雜記云半鉢卷之事紅の緋一重或五重に折
りて之を糸也又方此繩或をけりて之を糸或は繩
ふしそくけりてより扇より六尺にありて一但人此
段より一尺本を糸と記し一又ありて生糸
こころを志乃と二色之故黄糸よりとけり

此の
前ノ図ヲ入ルベシ





鉢巻とは云はれはひるい
のまん中ちちちちちち
まじりあまにあにむま
是もむとへたちまたの
こくあまももに上へ
ちさみかいひいの中
そちちちちちちちち
ひちちちちちちちち
ちちちちちちちち

濃紅鉢巻

文正記云津甲斐惣領千菊丸其齡十有
二萬髮縮雲蛾眉掃山寶靨如華肌膚琢
玉粉粧惟馥襟宇静肅無好戲謔天生麗
質清而不凡龍生竜子鳳生鳳兒者也濃
紅鉢巻袖緒総角燃立計也

薄紅梅鉢巻

源平盛衰記割注与一射扇條云伊勢三郎能

盛後藤兵衛實基等与一ツ判官ノ前ニ
引居テ面々ノ故障ニ日既晚レナント
又兄ノ十郎指申ス上ハ子細ヤ可有ト
ク々念給ハ海上暗ク成リナハユ
キ御方ノ大事也早々ト云ケレハ与一
誠ニト思ヒ甲ヲハ又キ童ニモ夕セ接
烏帽子引キ立テ薄紅梅ノ鉢巻又手繩
搔繻扇ノ方ヘソ打向ケル

按紅緋白ちを紅梅と云ふ者紅梅ハ生也
薄紅梅ハ生也

白綾鉢巻

八島双鉾云大将と相布一き人乃を二に何を
免されきん大々此控をたけくと相川至る如
此布をよし此より此をめしあしう者急何しと
川中ありふあやたしへて古きまよひおきとめ云

十七
大友貞慶記長尾口合戦系云相長尾比城代本村

甲斐書々五月五日の出仕のて免秋自種実北居城古
 不^ふ出^でく^く打^う節^{ふし}留^り留^りなる^りく^くの^の書^{しよ}女^{によ}相^あひ^ひを^を
 け^けて^て免^い白^{しろ}綾^{あや}の^の衣^いを^をき^きし^しを^を長^{なが}刀^{たぎ}よ^よ束^たた^たへ^へ出^いて^て屏^{びん}う^う
 ち^ち敷^{しき}周^{しゆ}回^{かい}し^しま^まく^くさ^さし^し拍^{はく}を^をさ^させ^せさ^さる^る此^これ^れは^は此^この^の世^よに^にあ^あら^らる^る
 免^い下^{した}知^ちす^す事^{こと}ある^る女^{によ}房^{ぼう}乃^のを^をう^うら^らき^きと^と免^い及^{およ}へ^へさ^さり
 白^{しろ}綾^{あや}

藤葉榮衰記云多珂梶原兎玉何レモ劣
 又大力ナリ八郎鑠帷一重着テ裾ヲ高

挑ヶ柄五尺余ノ大芥ヲ腰ニ差白綾
 ノ卷ニ七尺余ノ檜木ノ棒ヲ八角ニ削
 リ三十二ノ疣落シニ筋金ヲ渡シタル
 ヲ手末ニ打振云ニ

白練緯鉢巻

室町殿日記云義長公を先首の軍無下に倉屋を有ぬ
 今度ハ喰ひ多ん飲進くよすくはる^{はる}鉢^{はち}巻^{まき}を^を
 せ^せと^と池^{いけ}乃^のす^する^るもの^のな^なと^とく^く帳^{ちやう}臺^{たい}へ^へつ^つと^と入^いて^て黒^{くろ}葉^え

おろしの襦こ急ほひひつあうて白き練黄此幅を三
つの多をこをあままりに志うと志め三尺二寸の右口を
八寸此打力さして之練黄被治治のさたうる二尺六寸
此方七力杖杖つき云々

按凡布帛緞布系を経たといひ横なる系を
緯糸といふ生糸を経といひ緯糸を緯として織
るをぬりぬきといふ古書多く練黄と書るハ

例の字訓をかりたるなり
今ハ此物の名を不略して新
 とし又此ハ其の字をハ即

練緯
 あり

白鉢卷

愚耳旧聽記南郡智浅瀬石高条云理右村
馬の中間に大吹の所と云者大力此名を急と者
二七八人カもあると人の少法在るといふなり一ハは
者具是を急として白鉢卷をして切此本の
布の長計一尺一寸ハありるを
右の方に振り付て程大馬の馬といふ

武家名目抄稿第三終

て五つあり
么具雜記云折爲帽子の事



ヘリナシ
エホシトメ

本躰



地ハ極さふなり折極ハ右折一左折右子細五緒

此多々糸又ハ黒き糸亦ハ赤き糸に

守此去季三入ル之ハ折之とたる折之

一ツハ後方のひきせとる是ハ入事有侍の

若相之但三ツ此去入層一とるくはを右儀此

若に似たり

温古堂の元本ニ
兵具執記云三ノ一係是也
國トモ記載ナシ折爲帽子
ノ部ニモ亦之レヲ載セズ

武家名目抄稿第三終

幟具雜記云折爲帽子の事

て云つりある



本躰



地の極さなる折極右折へ左折右子細五緒

ハ高美此多々糸又ハ黒き糸ハ赤ハ赤子に

用一守此去季三入ハ之ハ折久シたる前此

取たり一ハ後方のひきをとる是ハ入事有侍の

若相之但三ツ此去入層一己るくはを去捨此

若に似たり

明治十五年六月三日旧稿校正 志村貞廉
同年六月五日再校 並書 山下輝長
同年六月五日仍旧稿校合了 小野田久

明治十六年三月

再校

鈴木行一



武家名目抄稿箋四冊
衣服部四目錄

頭巾 首丁頭巾 奉公帽 簞頭巾

能勢頭巾 能勢帽子 簞頭巾

南蠻頭巾 土佐頭巾 八方頭巾

額頭巾 投頭巾 綿帽子

衣服部

衣服部

四

頭巾 對頭巾 輪計子

南蠻頭巾 土風頭巾 八寸頭巾

並替頭巾 前替計子 後替頭巾

頭巾 首下頭巾 奉公計 醜頭巾

武家名目抄第稿笈四冊

衣服部四

頭巾

相國寺供養記云路次行列先陣隨兵一

番武田伊豆守源信在搔副張替中間男

小笠原兵庫助源長秀搔副張替甲役皆

中間男此一番召具力者二人着頭巾

堀河記云入道及人出仕等其時肩衣袴着其子

勿論 予法政中法免為てか川を為り色あり
定里山をす

射所拾遺抄云入道は犬の時法をえをきりる礼

之又うたは此の時ハさし出さるる礼ありてハ中間

六百七十七
笠掛射子神祀云入道ハ既中よりと山笠をて

手之也也又同ハささるは尾籠也かち立此時ハ

たとい若たきとてもさハかきる法也

九立入宗継祀云三月五日ハ法乗馬をさす馬と

とてさくられ三百余騎をて馬をさす頭中思

思出さるる好く皮袴立付とて云々

松隣夜話云信玄ノ旗本騷立大將ノマ

シマス処モ不知謙信モ猶以テ深ク働

キ一所ニ居玉ハス依之六人ノ力士凡

モ自身ノ敵ニ透ヲ不得シテ主ノ在処

ヲ失謙信一騎ニ成テ馳巡ル処ニ黒キ

鎧ニ香染ノ頭中ニ念珠ヲ手ニ掛ケ夕

ル法師武者三人一所に立侍十人計リ
打圍ニタル有リ云ニ
氏郷記云岡半七八黒谷ニツ候ケル今
日氏郷西國ヨリ飯洛ノ由聞エシカハ
半七入道スイケタル頭中ニ破タル衣
著テ態上氏郷ヨリ見エ隠レニ乞食メ
通りケレハ云々
按既巾ハトキンといひ後ツキンといハ辰後

今礼後ニ冠といハ朝後ニ既巾といハ皂履既巾を
とハ皂履既巾を賤と云ハ所謂冠ハ玉冠と云既巾後
深紗冠麦シと云ハシより藝後此帽に上古
の名を以テ既巾といハ相尋借衣シ見シ生
既巾ハ即改シ出シ首丁既巾といハシ力者此
儀後シ

首丁頭巾

平家物語割注云々此条云々此日此

うそくまらちん比ひてまよ志[○]ゆ[○]ち[○]や[○]う[○]と[○]ん
をそそつてきる

同長門本^{割注}本旨^{割注}教盛^{割注}云かめいそ比日福衣のよ
ろひ[○]に[○]ま[○]に[○]首[○]了[○]政[○]中[○]志[○]ろ[○]ろ[○]比[○]な[○]ま[○]免[○]の[○]よ
後ひに[○]ろ[○]は[○]ま[○]の[○]矢[○]た[○]ひ[○]て[○]云

源平盛衰記^{割注}教盛^{割注}夢忠正為義條^{割注}云平大
納言教盛ノ夢ニ三玉ヒタリケルハ保
元ニ討レシ平^右馬頭忠^正六條判官入道為

義大將軍ト方ホシクテ數百騎ノ勢共
アリケル中ニ或ハ柿衣ニ不動分サカ
ケタリ或ハ鶴甲トニ鎧キタリ或ハ首
丁頭巾ニ腹巻キタリナントメ讚岐院
ヲハリコシニノセ奉リテ木幡山ノ午
向ニカキスヘ奉テ都ヘ入奉ルヘキ由
評定シケリ

判官^{割注}御^{割注}鬼^{割注}一法眼條云^{割注}ほろろ^{割注}を^{割注}穿^{割注}て^{割注}さ^{割注}て

ハキリ此の如くハヒロクシテ中一所ハカリトナ
ルヲカフリ地シロキスワニソメ
タル小袴引敷ニテ太刀ヲハク
鎌倉年中行事(公方様御發向條)云御力
者或十人或八人又ハ六人何モ出長頭
中トテ黒布ニテクミリテ巾口カ
カ

タヲハヒロクシテ中一
タルヲカフリ地シロキスワニソメ
タル小袴引敷ニテ太刀ヲハク

按後三年合戦能是物凱陣乃所ニ力者の既巾
かすたる等あり着丁既巾なる座一とん
年中行子と志中たるハ色も異之形も同
相とも居る是又前条より引くお急吉信老(養)記カ者
此既巾有之とあるは時うつして其制のかさうする

よや又厚きのおたふさや未詳今の品を載て後
考ふ候し

七人をもて



奉公帽

季瓊日録云延德二年正月十九日相公
以禮部曰未廿三日茶毘過者可有還御
叔骨ニハ不可有御座云云愚謹白跡為
御相續者挽レ締下火拾骨等事御沙汰無
余儀云略中廿三日大公御服白綾薄黑
平絹御道服精好御袴萌黃唐羅奉公帽
小公御服平絹白小袖淨衣御袴御立烏

冠樺皮拉御刀云ニ

鮫頭巾

升頭巾

常照愚草云跡を子息の渡隠遁の身神に

頭巾は免の事と云くハ箱頭巾を常用し又升

頭巾同前之たニ頭巾に限りて紫色を用之類と云

さ紅色をハ襟中巾ハ青赤頭巾に限りて不若山云

外頭巾の子典既横昌院考ニ常用山云云云

らへうさしをぬり多々物なるをやうそたみ

給懐中せるやうは綱云云

伊勢者志返唐書云入道進神此子出任此と記ハ

巾を可免頭巾をハ益頭巾を可用所前よてハ頭巾を

扱へ懐巾ハ自然雲表と云うて此係所定なり

うつろを云也

給掛 按箱頭巾此ハ頭巾ハ升頭巾ハ角ハあらしハ松名

南ハはより推ハたハしハれハとハ他ハをハくハ此ハ頭巾ハのハ所

制今考ぬ處ありきるもの少かりき

能勢頭巾

外^三大鍬常鳥記云天文十一年閏三月廿日法光院殿
王女衣きんぎょ人衣ひとぎ十串掃と一ひとこの世よ伝つたえん一
法ほ光こう院いん殿でんより制せい中ちゆうあり
法ほ使し中ちゆう也なり云い々々奏そう者しや切き出で子こ世よ也なり

能勢帽子

大鍬常鳥記云天文十年十月十日三閱掃と殿でん

未ま入い法ほ光こう院いん殿でんの世よなり
一ひと緒いとの世よなり
二ふた緒いとの世よなり
三さん緒いとの世よなり
法ほ光こう院いん殿でん中ちゆうあり也
按あ是この世よに能のう勢せう頭かぶ巾ずきと一ひとあり也

簀頭巾

十番狂詩合八番左鷹野牽ひ犬居鷹出と早
晨あ木き綿わた断つ付け簀し頭かぶ巾ずき中ちゆう遠とほ路ろ獵り行ゆ曾も不た勞は山
追お立た雉け野の追お鷄と

南蠻頭巾

南五入宗純記云信長此法由志志にこころをい
たり白く此法別色は法由社せめられ度し
と法由く諸領を法由せしむるにえんえのそを
しやうふそ此法務存んる法由系秋田城介殿
志やうく此法由とてうく同をえん馬法務
お思ふ馬系に法由

玉佐頭巾

十九 見聞雜録云元末淺利武田の客居より他の

家老と八達多る家筋と云又中無余義也
此法由事子の混他士大物信玄證を為し
とそ何此法由意より有終殊更を身ハ病多あり
此法師甲も山中に隠況神妙之と云ひは唐綾威
程に土佐頭巾に似多し法一甲を法由せし

八方頭巾

最上義光記云

奥羽永慶軍記割注鯖内坂合戦條云久茲備

前守黒皮ノ朧丸ニ八方頭中ノ緒ヲシ
 栗毛馬ノ一二三行ニ打乗一陣ニス
 出大音声ニテ日未音ニ聞ツル氏
 郷ノ者共ニ手並ノ程ヲ見セヨアレ遁
 スナト下知ヲシテ究竟ノ若者百餘騎
 ナ勝テ馬ノ鼻ヲ双ヘ拔連テ切テ懸ル
 額頭巾

甲陽軍鑑云かくえん一さるを心をとめて二百騎

ハヨリヨリ志々々あはりて出ろつをさるる
 額頭巾ヨリヨリをさる板垣虎六才騎五町計
 追付既板垣虎六才騎五町計

投頭巾

六五
 續武家閑儀云秀頼五葉の時伏見より行列
 系代あり右側ハ二三日不入路一申立平常の最上
 義光此為敵に任し善角此日迎ふる由給ふに後
 乃馬々々てお里中これ初後神の相織に名取者

隆了あり、稜、招落せし、底あり、此殺、改、申、に、
多此先、(あ、兵、事、人、を、う、り、二、行、り、列、是、

綿帽子

九十六ウ

割注

奥羽永慶軍記(安積合戦條)云茂庭入道

ハ、シ、ニ、カ、リ、ニ、ナ、ツ、テ、味、方、ヲ、引、取、シ、カ、
敵、味、方、ヲ、弥、ヲ、ツ、カ、ケ、シ、カ、ハ、三、度、マ、テ、
取、テ、返、シ、敵、ヲ、ハ、ラ、セ、引、込、ヲ、窪、田、十、郎、
ト、名、ヲ、ツ、テ、大、將、ト、コ、ソ、ミ、ヘ、タ、レ、ノ、カ、

廿、シ、ト、打、テ、カ、ミ、ル、茂、庭、入、道、心、エ、タ、リ、
ト、戦、シ、カ、コ、レ、モ、十、郎、ニ、討、レ、ニ、ケ、リ、茂、
庭、生、年、七、十、三、老、ノ、身、ノ、鎧、ニ、負、引、レ、テ、
ハ、自、在、ナ、ラ、ス、ト、素、肌、ニ、黄、綿、帽、子、ニ、テ、
頭、ヲ、ツ、ハ、ミ、シ、ユ、ヘ、痛、手、薄、手、ヒ、マ、モ、ナ、
ク、蒙、レ、ハ、若、武、者、ノ、十、郎、ニ、ウ、タ、レ、シ、モ、
道、理、也、

翁お後云犯州天草一揆の時志月代より松平

豆別敷向ありしに勢州龜山越通河をりし時城
 至布多何某此老臣本多より使とて町口に出伊豆
 橋一法大儀子法堂よりあるりて返付法務利より
 法務陳事候山と乞練帽子成取由一乞八道中を
 氣法防此多めと乞下統書進上申山と乞指ぬ
 武家名目抄稿第四冊

明治十五年六月三日校合 志村貞廉
 同年同月九日再校 並書 水上昌言
 同年同月廿日 以旧稿一校加朱點了

塙 忠韶

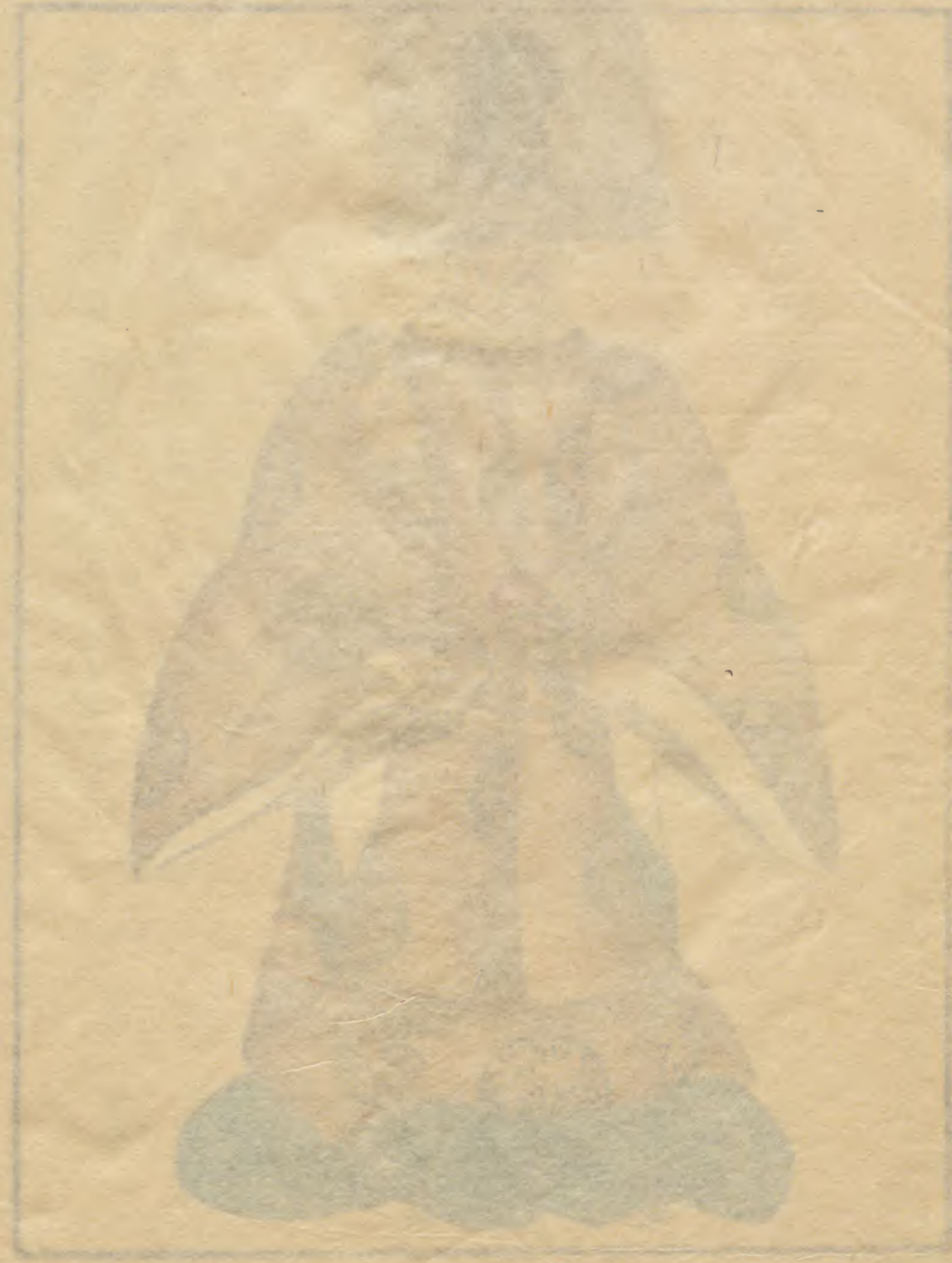
明治十六年三月
 再校

鈴木行一

温古学
十一
此



温古学
十一
此



武家
衣服目抄稿第五目録
袍
直衣
引直衣
小直衣

武家
衣服目抄稿第六目録
狩衣直衣
側續
襖
細長
布衣
半尻

温古去
衣部上下別
狩衣ヨリ半尻ヨリ
ナシ

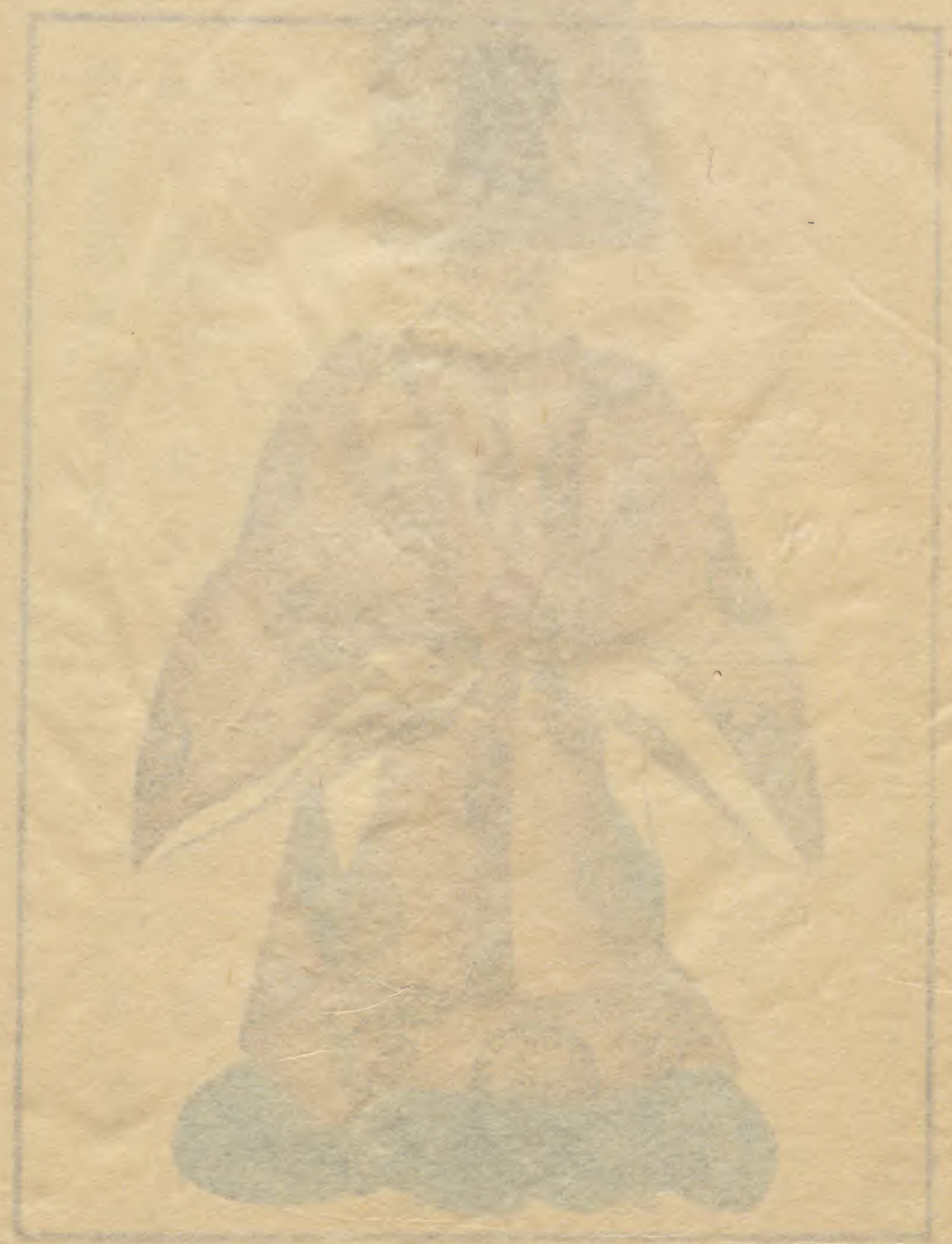
[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '衣部' and '別'.]

武家名目抄稿第五册

武家名目抄稿第五册
袍 直衣 引直衣

武家名目抄稿第五册
狩衣 直衣 側續

襖 細長 布衣
狩襖 半尻



武家名目抄第五冊

衣服部五上

袍

二 吾妻鏡云寬喜三年三月三日今日將軍

賴經

家始令拜春日別宮給是叙四品給之後

始著其袍御仍被准拜賀可下參被社御云

云著四位袍事可被擇日次之由雖有其

沙汰公卿之後直衣始者擇其日之例也

四品袍事必不及其儀款之由有職令申

之間只被用凡吉日云二

一和名類聚抄云袍揚氏漢語抄云袍薄交和

名宇倍乃岐著欄之袷衣也

三西三條裝束抄云袍文主上桐竹上皇唐菊

草窠二將軍家無輪任攝家丁子唐草

杏葉多須支龍膽関白二十リテハ雲立

大涌太閤ノトキ雲ニ鶴也又攝録ノ時復

ノ文浮線蝶ノ九ナリ

四後照念院殿裝束抄云始着下多張目之袍事

弘長元年三月一日愚曆云今日始多張目俗云之袍着

之弘長元年四月十日經光卿記云殿下園屋入道殿

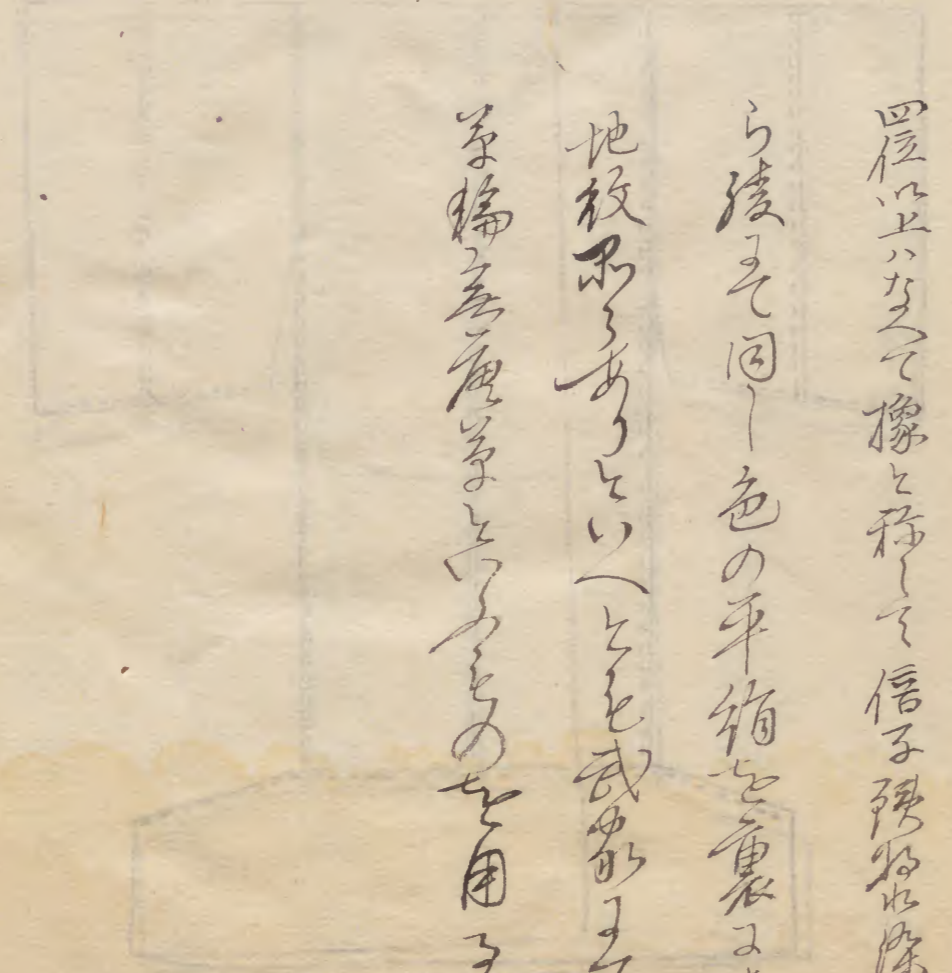
第二度執柄内時袍内直衣非志良扇面被用之

古賢之所為雖不必然自今春止志々良由令語合

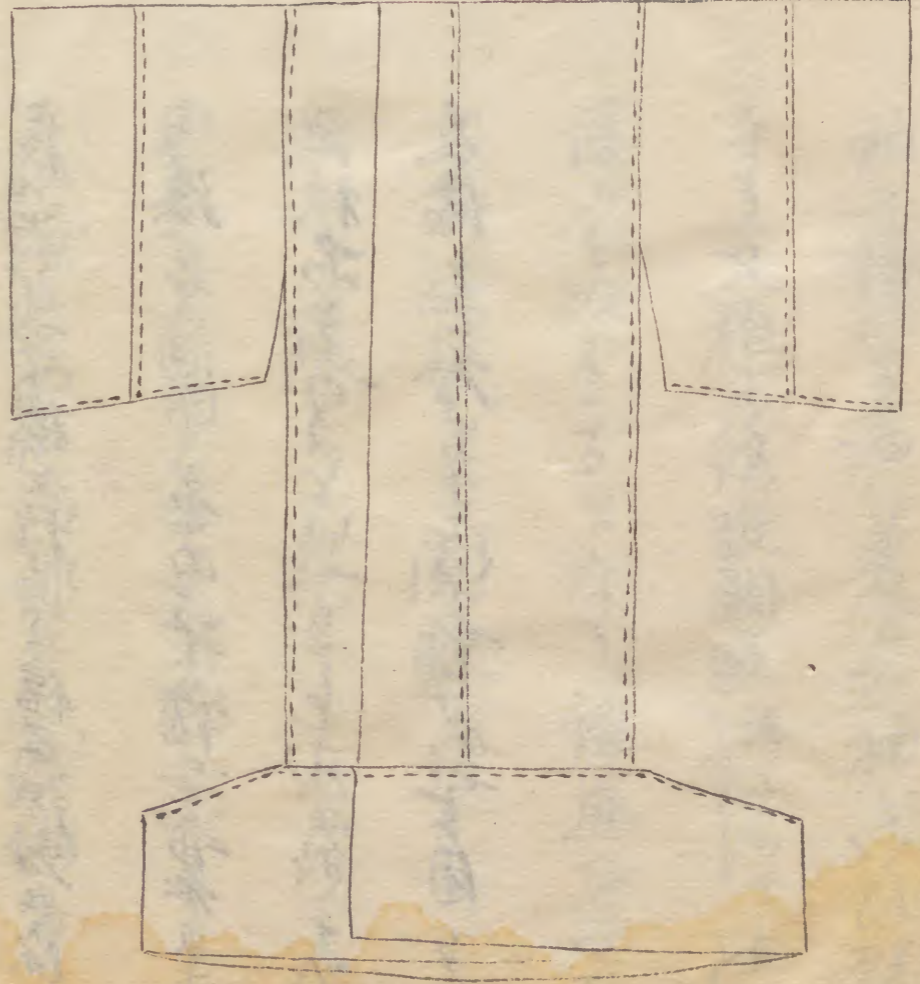
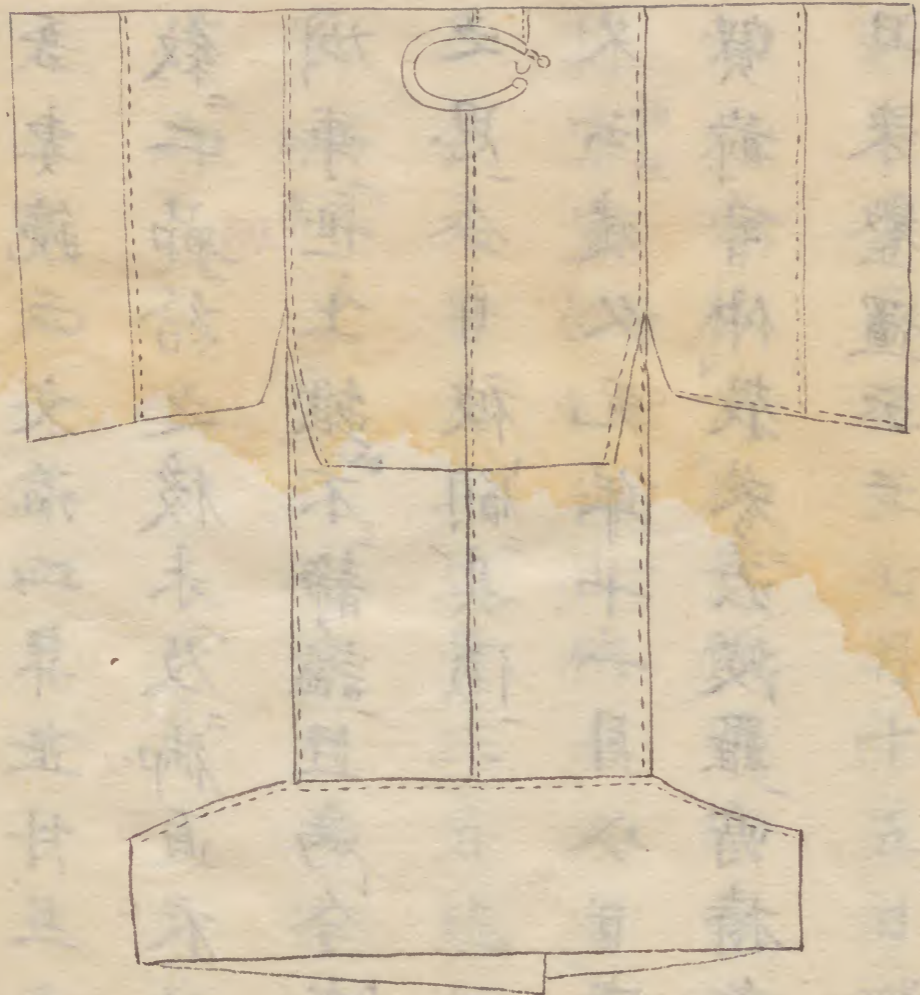
五按袍古束帯衣冠此上後乃有由ハキ又トイフ

乃腰比袋此上起前をハコエとも角袋より以齋の

袴幅を襦とひ生左右此解をる前をア^膝リと云凡
 袖二幅^幅ちる袖^幅を大袖とひ襦をハ又袖とひ
 たり又袍[。]の縫[。]腋[。]開[。]腋[。]後[。]ケ[。]ッ[。]テ[。]此[。]別[。]あり袖[。]下[。]を
 縫[。]方[。]とぬ[。]も[。]る[。]と[。]なり縫[。]襦[。]を[。]マ[。]リ[。]シ[。]との[。]ひ[。]を
 又[。]此[。]襦[。]の[。]開[。]腋[。]を[。]口[。]キ[。]ア[。]ケ[。]ト[。]云[。]て[。]武[。]友[。]此
 襦[。]と[。]し[。]襦[。]を[。]こ[。]の[。]り[。]く[。]り[。]し[。]る[。]縫[。]襦[。]は[。]常[。]に[。]襦
 の[。]長[。]さ[。]に[。]同[。]く[。]ま[。]る[。]色[。]を[。]い[。]う[。]一[。]位[。]深[。]袋[。]二[。]位
 三[。]位[。]浅[。]袋[。]四[。]位[。]深[。]袋[。]五[。]位[。]浅[。]袋[。]あり[。]し[。]を[。]中[。]古[。]以[。]来
 四[。]位[。]以[。]上[。]な[。]る[。]と[。]據[。]と[。]稱[。]す[。]信[。]子[。]強[。]弱[。]條[。]を[。]用[。]ひ[。]地[。]は[。]各[。]各[。]
 ら[。]違[。]え[。]同[。]一[。]色[。]の[。]平[。]箱[。]を[。]重[。]裏[。]に[。]出[。]入[。]の[。]敷[。]織[。]なり
 地[。]紋[。]あり[。]あり[。]とい[。]一[。]と[。]も[。]武[。]友[。]に[。]て[。]ハ[。]大[。]き[。]の[。]襦[。]は
 常[。]編[。]の[。]重[。]裏[。]に[。]出[。]入[。]の[。]敷[。]織[。]なり



直木



直衣

一 吾妻鏡云文治二年正月三日壬午去年
 叙二品給之後未及御直衣始沙汰依豫
 州事世上雖不靜謐且為令成衆庶安堵
 之思今日被刷其儀
 二 又云建久元年十一月八日戊午早旦伊
 賀前司仲教參六波羅所持參御衣也是
 日來整置云二

三 又云貞永元年七月十五日勝長壽院一

切經會依有御意願舞樂等殊被刷其儀

將軍家賴經御車御出供奉人有其數

又云文曆元年正月三日境飯以後將軍賴經

家御直衣御車御行始武州御亭上野介朝光

伎御御

四 又云寬元二年四月廿一日辛卯今日將

軍家賴經若君六歲御名字賴嗣御元服也若

君著御装束有文御直衣二倍織物御指貫白單不令結御鬘給親實

朝臣候之

五 又云建仁元年九月九日丙辰廣元朝臣

始相具行景參御所行景花田狩衣先候襖袴

侍所次依召廻石壺參廂御所簀子頓之

左金吾出御鳥帽子其後有勸盃之儀給直衣

御盃於行景此間被仰云為蹴鞠師範召

請之處適迎重陽日始遂對面故猶前庭

籬菊浮盃永可契萬年者行景跪盃金吾

自取銀劔令與之其時之內御對參上是

六 雲并乃花云次義詮大樹考の並るうす色のくまのわりの指貫

左此かささるる山名氏給補氏法方蹴を所右此東

ふをうに揚津掃給能直當此役

七 建内記正長二年七月五日状云任幕下

御昇進事自三寶院殿委被申候哉珍重

候如日次事早定可被申出候哉如何

必定欵御拜賀以前御社参着御直衣不
可有子細之條勿論候哉之由云云

八 又云永享三年十二月二日室町殿御参

内也善法寺宋清法印八幡校真弟兒童可

参内也宋清童参内之時鹿苑院殿有御

参内佳例云中略着御直衣御歩儀有

御参内廿八日今夜御参内御院参也是

歳末御禮参也先渡御讚州宿所中次渡

御新藤中納言鷹司烏丸亭云々於此亭

着御直衣給

○佐竹宗三閉書云直垂の紐をハ方の水多左右此を

引と云そ左の紐方のぬくろよりとり結へそ左のひも

をハ方此をよまを〜〜〜と云と云と云

のそ右をハ直垂と內衣の百結紐の付る

前より此方の紐

○武田射禮日記云直垂ノ紐ノ事是モ左

○武田射禮日記云々
此二條温古字云直垂ノ部ニ
記載無シ蓋シ直垂ノ部ニ記載
スベキモノナルカ原ノマニ在リ

必定欵御拜賀以前御社参着御直衣。不可有子細之條勿論候哉之由云云。

八 又云永享三年十二月二日室町殿御参

内也善法寺宋清法印八幡校真第兒童可

参内也宋清童参内之時鹿苑院殿有御

参内佳例云二略着御直衣御歩儀有

御参内廿八日今夜御参内御院参也是

歳末御禮参也先渡御讚州宿所中次渡

御新藤中納言鷹司烏丸亭云々於此亭

着御直衣給

○佐竹宗三閉書云直垂の紐をハ右の水多左右此を

引と云そ左の紐をのめくうよりと云左のひも

をハ刀此を右をハ垂垂と內衣の百紐の付る

帯又あきめ右をハ垂垂と內衣の百紐の付る

と云ふ此をハ右の紐

○武田射禮日記云直垂ノ紐ノ事是モ左

八 紐は力下へ廻シテ押カウベシ右
ノ紐ハヒタシレト內衣トノ間ヘヲシ
入テサテ直衣ノ服ヨリ取テ袴ノ腰ニ
納ムヘシ

九

康富記云室^{宝德}二年七月五日丁未是日室^{義政}所^殿着^所
直衣^所系内也^所样^所架^所以^所前^所着^所直衣^所事^所可^所为^所何^所様^所哉^所
日及^所所^所所^所清^所少^所纳^所言^所右^所大臣^所殿^所且^所所^所注^所進^所云々
康苑殿^所康^所唐^所元^所四^所内^所某^所泉^所殿^所饒^所向^所饒^所物^所彼^所進^所

上之件日被^所官^所所^所着^所衣^所了^所同年七月廿五日大^所将^所大^所纳^所言
所^所样^所架^所也^所宝^所道^所院^所殿^所貞^所治^所年^所中^所殿^所所^所会^所所^所系^所内^所
时^所所^所出^所衣^所被^所着^所由^所且^所祝^所後^所普^所光^所院^所殿^所被^所计^所申^所也^所類
朝^所方^所为^所類^所經^所将^所軍^所等^所样^所架^所以^所前^所着^所直衣^所有^所系^所内^所
例也云々

十

法^所祥^所集^所抄^所云^所親^所王^所所^所着^所解^所ハ^所法^所束^所帯^所此^所時^所サ^所付^所也^所
又^所由^所之^所多^所出^所之^所女^所至^所官^所以^所下^所所^所着^所直衣^所の^所時^所ハ^所云^所々^所

又為き物又法祿よりよゆもも也
應永元正十七所名字義將

四年九時法衣所よりきみももも之袴衣を看せむ時ハ

宮せきしめきりもれかみをゆし厚きあり

十一 西三條装束抄云建久元年十二月二日

右大将 頼朝四十四歳建久三 直衣始ノ

参内ノ日直衣ニ藤丸ヲ固織物ノ奴袴

薄色ノ紅梅ノ衣ヲ出ス嘉禎三年十月

前大納言 頼經号七条 参内ノ日直衣ヲ

着用貞治六年三月廿九日寶篋院將軍

義詮于時大 納言卅八歳中殿御會ニ直衣薄色ノ

固文織物ノ指貫紅打ノ衣ヲ出ス十三 康曆

二年正月廿日鹿苑院將軍直衣始ニ二

藍ノ直衣紫ノ織物ノ指貫文藤ノ丸紅

ノ下袴腹白ノ結紅打ノ衣等ヲ用ラル

寛正五年十二月五日慈照院准后于義政

左大臣准 后三十歳新院ノ御幸ニ直衣如指貫 田花

康曆二年ヨリ
項ヲ改ムベシ
十三

子層き物又法福まのゆまう也
應永元十七内名字義持
室町殿若公清元後

九年九
時法衣出くくさみくさくく之被衣を看也む時ハ

官せきしめたりこれかみをゆり層き

十一 西三條装束抄云建久元年十二月二日

右大将頼朝四十四歳建久三直衣始ノ

参内ノ日直衣ニ藤丸ヲ固織物ノ奴袴

薄色ノ紅梅ノ衣ヲ出ス嘉禎三年十月

前大納言頼経号七条参内ノ日直衣ヲ

將軍廿一歳

着用貞治六年三月廿九日寶篋院將軍

義詮于時大納言卅八歳中殿御會ニ直衣薄色ノ

固文織物ノ指貫紅打ノ衣ヲ出ス十三康曆

二年正月廿日鹿苑院將軍直衣始ニ二

藍ノ直衣紫ノ織物ノ指貫文藤ノ丸紅

ノ下袴腹白ノ結紅打ノ衣等ヲ用ラル

寛正五年十二月五日慈照院准后于義時

左大臣准新院ノ御幸ニ直衣如指貫花

后三十歳

織色文 雲立浦 被用童躰ノ例應永元年十二月

十七日勝定院持義元服以前二直衣織紫浮

文小柏白綾蘊芳文草綾濃色指貫紫二重織

物地文龜甲白浮下袴紅扇横目等ヲ用

十一宿德之例文明十二年正月十日准

后義政于時左大臣年始ノ参内ニ直衣

如指貫綾白襪緋ヲ用テ侍ル也四月廿

六日大涂金剛院持通于時前関慈照院

准后参内ノ日生ノ白平絹ノ直衣同色

ノ指貫ヲ着用ス

十四按和名抄ノ揚氏漢語抄云襦袢須臾互介此古名毛

云云保之能古名毛とあり也。衣此字を用るハ例此

例を依り方之者古名毛を服下して云保之

とのいふ之裁縫ありき袍のきくして只長を

幅もいさかつせむきのなる地を考ふべきは綾

浮線緑綾の丸腰紋色白ノ裏を紫年々短く次第に

薄くして老者ハ淺黄終ニ白此ト云ク是ハ
地紋ハ葵浮織相チリノ多紋の後チリハ梅也衣ノ上
其ハ薄物裏ナリ紋三重襷色ニ藍ナリ多紋此
薄物カトリ此也衣ノ上ト云ク又平絹也衣モ
あり

十二 西三條装束抄七に直衣ノ冠ト用ゆる冠也衣ト稱也強
名目ニありしきとも烏帽子也衣ノ對して稱也云々
とあり武家ト云く着用の事ありしや可也

御引直衣

湯殿上の日記云文祿四年二月廿七日大々々年との云

此北三三色色のの御御引引直直衣衣
中中三三色色のの御御引引直直衣衣
中中三三色色のの御御引引直直衣衣
中中三三色色のの御御引引直直衣衣
中中三三色色のの御御引引直直衣衣
中中三三色色のの御御引引直直衣衣

たはし御引直衣永孝の御引直衣秀次の御引直衣
さきも後さき永孝の御引直衣秀次の御引直衣
さきも後さき永孝の御引直衣秀次の御引直衣
さきも後さき永孝の御引直衣秀次の御引直衣
さきも後さき永孝の御引直衣秀次の御引直衣

御引直衣と稱するハ天子尋常の御衣ト云下
ニ格別なる御衣ナリ此格ニ長して引ク事也

日早旦參室町殿上御所諸大名御對面
之後略御室、中御參於常御在
所御對面申次、豐朝臣持衣主人御小直
也衣十二年二月廿五日戊戌傳聞八塔供
養可為來四月十六日云二導師可為禪
家其仁未定可為貞和康永例云二其時
寶篋院義詮殿御結緣御聽聞也今度任例内
可有御出御小直衣又云年月不詳五日庚子早

又云五日云ニヨリ
項ヲ改ム可シ

且着直垂參室町殿今日可有八幡御社

藤文各浮織物也
略辰刻着御小直衣白禊御指貫薄色文

薩戒記云永享九年八月十九日丁丑今日相國寺新倉

入院也仍相府出侍上八葉車新中納言實

將兼侍車後殿上人左衛門權佐永豐朝臣侍

右女將雅親侍皆資益侍諸大夫左京大夫

康任朝臣立侍榻敷皆侍衣也

日早旦參室町殿上御所諸大名御對面
之後略御室中、御參於常御在
所御對面申次、豐朝臣持主人御小直
也衣十二年二月廿五日戊戌傳聞八塔供
養可為來四月十六日云二導師可為禪
家其仁未定可為負和康永例云二其時
寶篋院殿御結緣御聽聞也今度任例內
可有御出御小直衣又云年月不詳五日庚子早

旦着直無參室町殿今日可有八幡御社

參云二略辰中刻着御小直衣白襖御指
織物也藤文各浮

薩戒記云永享九年八月十九日丁丑今日相國寺新倉

入院也仍相府出出小直衣上八葉車新中納言雅

將衣乘所車後殿上人右為權佐永豐朝臣後藤
右女將雅親後當資益後諸大夫右左系右丈

藤任朝臣五市榻款
皆侍衣也

慈照院贈相國記云康正二年三月廿七

日丙申天晴今日参詣石清水八幡宮略中

辰一刻着香小直衣立文松丸蒲黄柏文松

物指貫出座公卿座先聖護院准后被加

持次土御門三位有季卿重衣入中門廊北

妻戸来座前奉仕身固了

冬按山車衣と重衣乃と齋と襦あり袴衣此とと袖

且と活あるたうとろと袴衣重衣とと地紋と色と

付衣定む多法な一浮文堅又此織物練の着物亦を用

て裏と平絹練生亦定れるとと色は表より位より

あり結は着平紐の襦芳袴紫白以下着危は薄黄此

袴濃き着き打更せたり又長絹此小車衣と白

糸をよりて結と正るとと

—○—

大將軍源朝高公居上御出陣時此の御衣は
實御侍衣也又云

狩衣直衣

四十七

吾妻鏡云正嘉元年六月一日甲申御所

旬御鞠也為一條侍從定氏奉行催人々

將軍家宗尊親王御狩衣令立御云々

日吉社參詣記云應永元年九月十一日

申室町殿准三后從一位前左大臣征夷

大將軍源義滿公辰上剋出御片庇四方

輿御狩衣直衣云々

輿 按移衣車衣より六前条此小車衣此一名なり

側續 林軍器志云此車衣此一名なり

年中恒例記云此對面以東より西系及公家法

中此點法同以テ後お座止利門田然此目也此利門

田迄然此目以テ別法此系ヲアテタメラレ此移衣此ハ

此キ法及ニヨリメサレテ移家以下此對面也

滿濟准后記云正長二年八月十七日今

林日室町殿様ハ幡御參詣御輿 被用鹿

苑院殿御召喚畢云々御装束ッハッ

也鹿苑院殿御佳例候云ニ

按故実拾要ニ傍續紋色等定レル法ナニ織物類

リ裾有欄但小車衣ノ欄トハ名別也此形似小車衣

トあり新野問答ニ小車衣移衣車衣二物同車衣

移衣ノ欄ある物ニ俗ニハ傍つと云ヒトあり

ニ説同トカク古今抄卷三に三内口味ニ内ニ衣裳

為帽子車衣大長着ノ小車衣大長着ノ言波

は。親王看と安を、故実拾要此説を
うと先傍續の裁隨寸法源憲秘抄に詳
あり又ハツキといふものあり名々や、お
中、お天、又あるお之、の是、出、

不用和袴亦先例と見え多し

細長

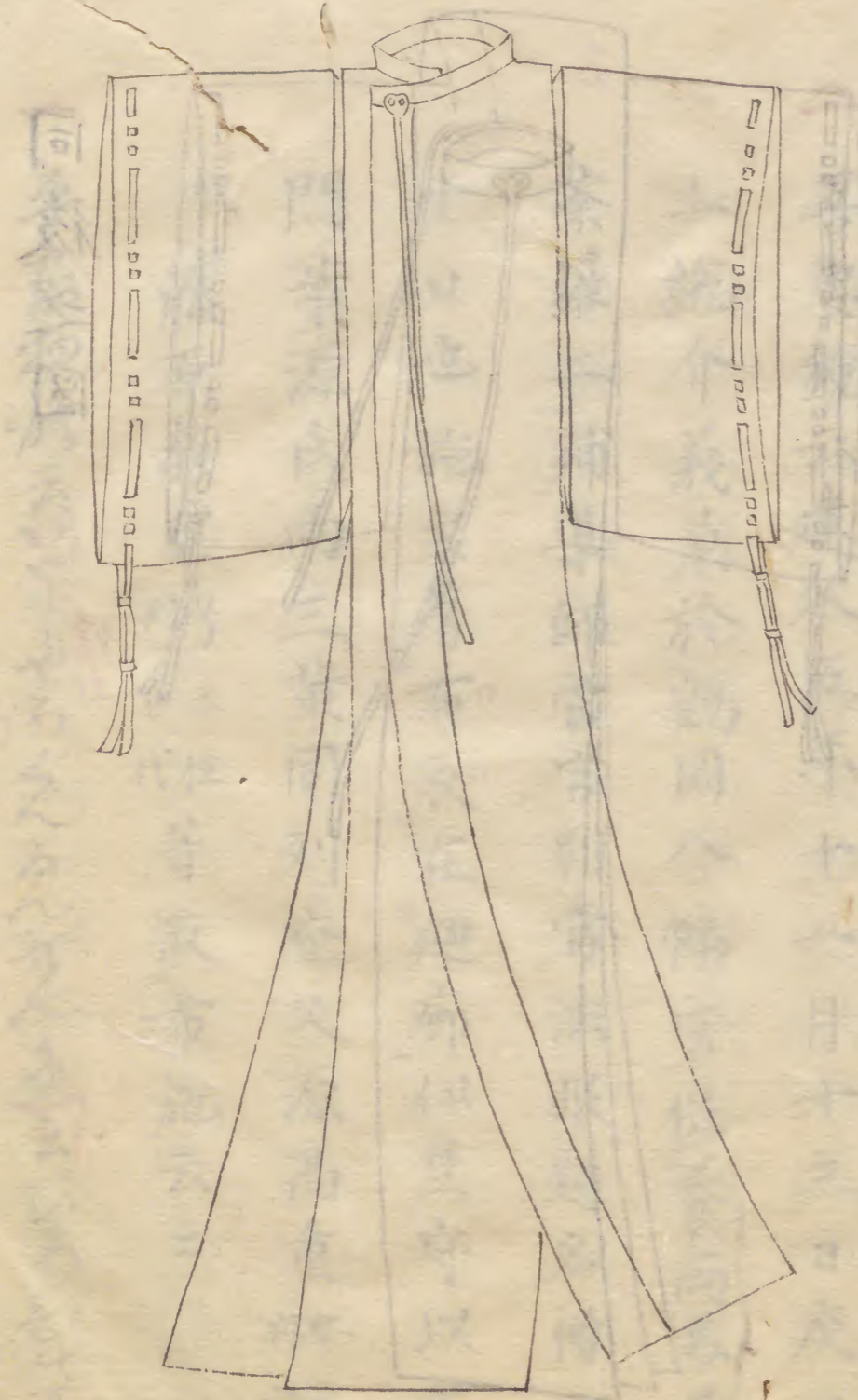
慈照院教所髪立次方云於髮領法祝次方寢^寝教

細長儀在る先席を、
ラ、織物の二法服を、
口細長^{法地白唐織物}紋めして、
マ席向アリ

按細長の細長の袍と、
裁て、幅、
の、長を、紐緒を付事

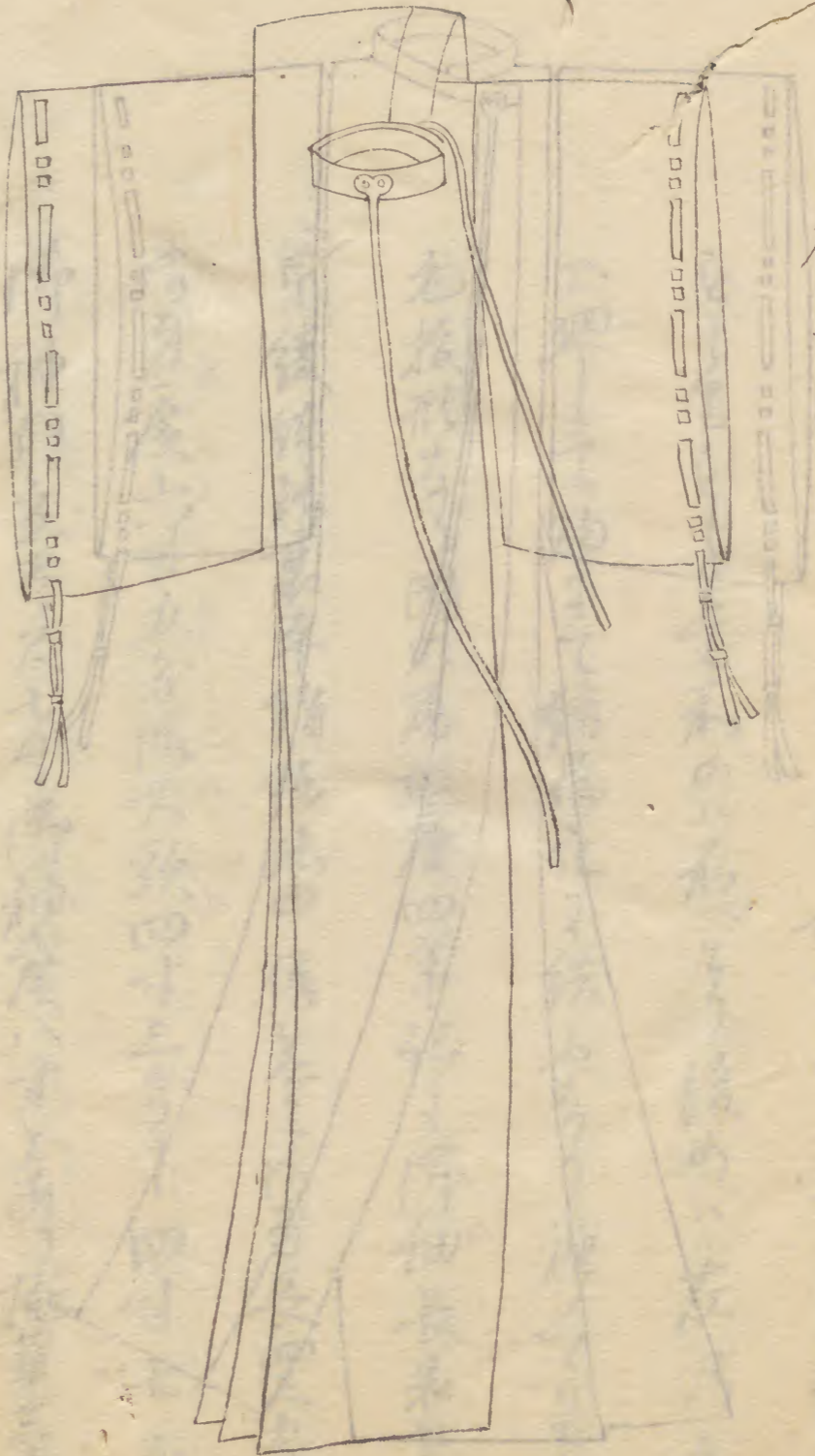
水干のこしそ結格ハ右の肩より前後の緒を一
 こし里こしきて前のハ前こし後のハ左の肩
 へ廻して胸より諸端穴に結おさるる袖こし里を
 毛撥形さるる圍方唐延慶四年記く袖細長表白龜
 甲綾結結裏平絹結結中倍々此身長四尺五寸
 此身度六寸五分此大頸四寸三分下四寸七分
 此袖引立者六寸七寸此袖度八寸とあり極葉葉
 用細長[○]時不用袖袴[○]是先例也と及こし

細長前之図



同前之図

同後之図



時牙前之圖

布衣

十四十九才

二 吾妻鏡云建久五年十一月十三日庚子

上総介義兼於鶴岡八幡宮供養兩界曼

荼羅二鋪導師當官別當法眼題名僧六

十口也施主著布衣在廻廊伊豆守以下

門葉源氏兩三輩同列座又源高重判官

代藤原教重判官等取布施云二

一 平家物語云割注也うあうえんうせんう糸う云うひうろう云う了う

にハ切ラサ記厚ク此ニモ志イクヤ古ク
を去ララハ以テクアケサセテ兵衛此すけ
反出ラレテ多事ノ事ケ反ハ不クイコタテ
ヨク也

三

吾妻鏡云建久五年十二月廿六日壬午
永福寺内新造薬師堂供養導師前権僧
正勝賢云々將軍家御出北條五郎時連
中持御劔愛甲三郎懸御調度云々供奉人

六 袴源藏人大夫頼兼武藏守義信以下四人

畧 義賢之弟 頼兼武藏守義信 以下四人

四

又云建久六年六月三日丙辰將軍家若
公一布衣十御参内駕網代車給左馬頭
隆保朝臣相具為加扶持也供奉人相模
守惟義伊豆守義範左近將監能直左衛
門尉義盛重朝景秀左兵衛尉清重常秀
景茂右京進秀時各布衣 小山五郎宗政

佐々木中務丞經高御各直左候

五 又云建仁三年三月廿六日乙未將軍家

衣御布渡御集人入道宅有御鞠入數北條

五郎紀内富部五郎比企弥五郎肥田八

郎義仰源性等也伯耆少將候見證凡此

間隔日御鞠也十一月三日丁卯將軍家

御慶賀之後頓奉神馬於石清水八幡宮

給和田兵衛尉常盛衣著布為御使

六 又云建永元年正月十二日甲午今日將

軍家御讀書始相模守仲業束為御侍讀

時剋持參御注孝經於寢殿南面將軍家

衣御布出御云年八月五日心木小泉四

七 又云嘉禎二年八月六日庚寅新造御所

御弓始也匝作武州以下人々著布衣被

候庭上將軍家於簾中御覽周防前司為

申其儀前武州衣布著西侍北座給御家人

數輩參候云々

八 又云正嘉二年八月六日壬午日向前司

祐泰可加布衣人數之旨被仰下之間武

藤少卿景賴達奉書於越州云々

九 又云弘長元年八月五日乙未小泉四郎

左衛門尉可加直垂衆之由云々出羽藤

次郎左衛門尉被仰下可着布衣之旨之處

六 日數已迫之間狩衣難用意之由云々

十 又 吾妻鏡云正嘉元年正月一日丁亥坑飯

以後將軍家御為帽御行始相州禪室亭

供奉人布衣武藏守朝直尾張前司時章

下略

十一 又云建長二年三月廿五日辛卯將軍家

為御方違入御相州御亭供奉人々布衣

下括前右馬權頭武藏守尾張前司下略

十二 又云脱漏云嘉祿二年正月一日丁巳新

造御所境飯武州令沙汰進給相州已下
著布衣候西侍如例出羽前司家長刻限
之申次出御_{御布}

百練抄云曆仁元年六月五日戊申將軍

被參春日社布衣輩卅人隨兵百騎云々

太平記割注天龍寺供養條云此上武家

沙汰下シテ當日供養ヲ執行ト翌

十日參詣ケリ中七番ニハ役人ニテ南

部遠江守宗繼高播磨守師冬二人ハ御

劔ノ役長井大膳大夫廣秀同治部少輔

時春御當ノ役佐々木吉田源左衛門尉

秀長同加地筑前三郎左衛門貞信ハ御

調度役和田越前守宣茂千秋參河左衛門大

夫惟範御笠ノ役以上八人布衣ニ止括

テ列ヲ引ハ番ニハ高武藏守師直上

杉彈正少弼朝貞高越後守師泰上杉伊

豆守重能大高伊豫守重成上杉左馬助
朝房布衣二下拈シテ半靴著テ二騎ツ
又左右二打並夕リ上八人可成二止拈

十五花營三代記云應安元年四月十五日庚

剋左義馬頭殿御元服中御裝束布衣立烏

帽子同十七日被着折烏帽子香御直密

十六又云應永廿八年正月廿九日御所樣有

御參内自御局被召御裝束仍無布衣

十七明德二年室町殿春日御參詣記云御出

門卯一四方輿御力者三手十番頭八各

重衣衛府侍十各布衣裏ヲウツ色々衣

ヲ重綾ノ袴或又練貫袴云二

十六親長記云文明十五年十一月七日細川

右馬助政賢紅狩布衣五位一人六位四

人

十七按布衣者此書にホウイト讀即袴衣之倭名乾衣抄

に文選云振布衣は間云襦衣加利伎服と云え多るは之

襦衣殿の以ましく振布衣を襦衣といひしは後世

織物厚相糸をとりて洞しるを襦衣といふは後世

襦衣を布衣といふ色く定めらる法ありしは一

幅より神の後より五分はより下より五寸程ぬ

はく袖拵を毛抜形なり伊勢貞丈より秋原に筆出

強心式より袖拵を裁く襦衣と云ふ正を裁りし色

より正をえりて襦衣を布より制する事とあり

ありしと鷹飼の彼より神より此縮ハ小なり

たるは神をくらし此料を鷹飼を山郡より出

業ありハ本堂より神比司からさるへりたり碓氷

天皇宮多天皇たると殊く鷹飼をぬすむといひ

野り孝成ありと風聲此左の柱をぬすむあり

振て市よりかき風聲の内より所鷹をぬすむ

といしより二系良基公の碓氷野相伝て見え

され公の殿上人も多りかき鷹をぬすむ程は

綾羅段紗衣と此袴衣用られしより花縷此袴と
 ありたり存留ありぬ時便利の後をれり
 ありと存出たりありたり花縷ありて布をハ
 用ひざるも子孫も此名を失せしし布衣と
 以てしりて子可有存出ぬの相と衣袴合致此
 位様より出たりあり
 し

十九 増鏡云文永十一年甲戌四月廿六日春宮に位仰り

中さ七路中二箇古布衣龜山新院此法年よりぬ白河友

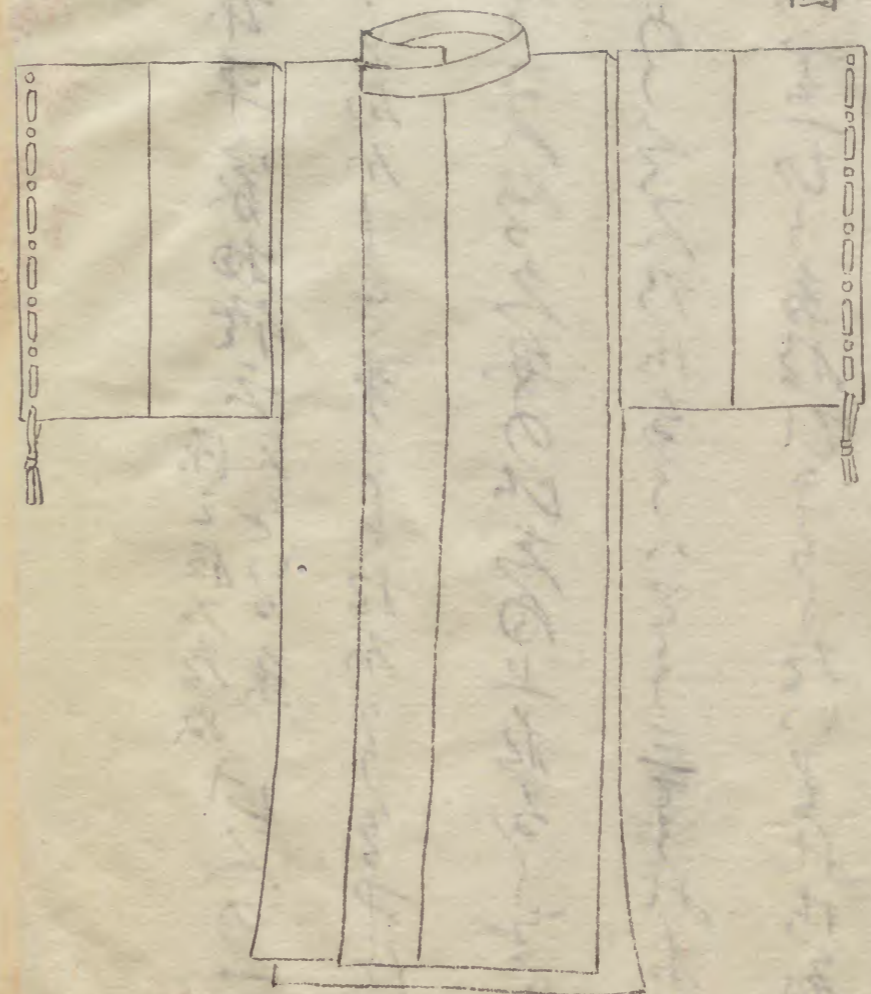
一いつち七路八葉此法年よりぬ此袴衣山吹此二葉紅の法ひ
 是よりすまじ此袴衣 縫木行一
 布衣 即部十六年三月

同月十日再録	同月十日再録	同月十日再録	同月十日再録
同月十日再録	同月十日再録	同月十日再録	同月十日再録
同月十日再録	同月十日再録	同月十日再録	同月十日再録
同月十日再録	同月十日再録	同月十日再録	同月十日再録

衣袋各目抄蘇美五冊

九増後云文永十一年甲戌四月廿六日春宮^{龜山新院}即位つり
 中^中さ^中せ^中路^中吸^中二^中月^中廿^中日^中布^中衣^中此^中法^中年^中を^中し^中め^中小^中白^中河^中友

布衣之図



へいりせ路八葉此法車也へり此袴衣山吹此二^童を^童紅^童の^童法^童也
 と^子り^子す^子氣^子此^子あり^子と^子の^子さ^子ぬ^子き^子き^子き^子云^子

武家名目抄稿茂五冊

明治十五年六月四日曰稿校正 志村貞廣
 同年同月九日再校并書 北川良忠
 同年同月十一日曰稿校正加朱點了 數原尚樹
 同月十二日再校成

明治十六年三月

再校

鈴木行一 鱧

七 吳本平家物語云 源三位入道 一人の一二此 志 狩衣

やうとあふしき事とを相なりき中にも近衛院此

古字さぬる之安の比志の上をきく事ひ(七世終

事ありてん乃出ちうハマニニニ此本ありよう

之後云一むる多形ひきくたい里此古教ニかほり

時ハウありて古はありてゆきくせ終けりき信うきく

に相不せそ大けりひほりしゆせこれなきもそ

志るしもあうりういハ源平此中に志かり屋をゆ

をめしきけいこあえしききやうせんきあうか

里川のあるの古字寛治の比もまよきやうにをひ(七世

終けきハ生時此將軍きうきめきれきうきうき

く此かりきぬ平ぬまこあきく此りに山とく此れ

をめてまいぬるとりや二とくそえて南殿北大ぬりに

志ありき

一 夏州後三年徳祖云武衛うきくて義光くいふ屋

行 諸身活然事あまのけと志るる人等法候一人を路
 て思ふ事より中 控ふといふ親光郎若とも此
 中に雅方控ふ事あると撰む事孝方社にあらめと
 侍らむより孝方越後親あつる色あつるをぬにむ
 のまら侍を考て左方まらとまら記あり



世

布衣記云衣の事歳十六七許までと平絹乃より
多へ色は移衣此よりよりと清黄紅の間多

へ又あこ糸を用ひ也年十許より紅のあや多

歳廿二三までハの田也其の後假令と申す香貫白風

情此を里或可用也いりも依移衣色の好也

三

四三ウ

事家物語云忠盛此郎等もハ一門多

志本之助平貞光の孫志人忠三郎右史家房の子に

左之衛尉家貞といふものあり舊書此移衣此下

に最黄初と云此腹^腹也若狭袋法事と云右刀指

て及上此少危を畏て下ははる

五

又云鶴^{割注}條云頼政たのみ子多郎昔遠江西臣人

猪子たよりなる此かきさうりまひ多うける矢かひを

た一人そくくうけの移衣と二重此移衣と山

多此尾を毛門を毛多うける許矢二筋後

弓に所流て南展此衣の何候也

六

八

又法住寺^{割注}衣^{割注}條云水山觀業爲書此移衣乃下に

茲莫威威の服是也為月毛有馬江多々河系を以

に為多々今井四郎兼常松の系くく山に以て

為預頸乃骨也此為う川を射て馬より例倒に為

八 吾妻鏡云建久六年六月廿四日丁丑將

軍家御参内頼朝若公頼家織物狩同参給依下令申関

東下向暇暇給也

八 又云建長四年四月一日甲寅寅一点親

王自関東御出未一刻出御固瀬宿御迎

入自参會此所小時立行列中次御輿上

簾御服頸文紗前黄御狩衣紅御衣

九 吾妻鏡云寛喜二年十二月九日丙寅亥

刻竹御所廿八年入御于营中是御嫁娶之

儀也緯起楚忽為密儀之間非晴儀且被

用御輿經小町大路入御於南門雜色二

人取松明前行供奉人越後守中相州白

狩武州香被候御輿寄云云

士新式目弘安七五廿七許云元三袴衣可用三具五位

以上袴衣可用穀止草一の者性

十三太平記中殿御會條云征夷大將軍正二

位大納言源朝臣義詮御薄色立紋

織物指貫ニ紅打衣ヲ出シ常直

衣也左ノ傍ニ山名民部少輔氏清濃滌

ノ指貫ニ款冬色狩衣著ノ帶劔ノ役

ニ隨ヘ會右ノ攝津掃部頭能直薄色指

貫白青織物ノ狩衣著テ當ノ役ニ候ス

佐々木備前五郎左衛尉高久二重狩衣

ニテ御調度ノ役ニ候ス本郷左近大夫

將監詮泰ハ香ノ狩衣ニテ笠ノ役ニ隨

フ

十増鏡云云とのすくをうる七人出む久にのゆる中に

いひぬま此判及上りよをのさ記の将軍の布子袴

道よりより一々れハ何とをもこ一とをあらから

山をよきてのる中いひぬまは利安とくさの持
衣あをけ此馬にさうなものをさうるを都く多と下は
けきうさのさう大長なると此法うさうに
よそぬ厚く云々

○
十七 滿濟准后記云正長二年四月廿日室町殿源佛為門
跡佛車佛持衣也廣橋中納言親光の持衣佛車
出劍役さうさう後源さう法元後以後被任佛佳例
衣成給之仍法持衣法着用さう他前(衣)此也尤

門跡眉目此子也三献之後法重系長衣着替了

十五 滿濟准后記云正長二年三月九日御元
服御装束事兼有其沙汰自二條攝政家
被計申畢白襖御狩衣御コキ紫ノ御指
貫御下括云々

十六 又云正長二年三月廿三日今日室町殿
御参内始并御院参云々御牛飼十余人
各直垂縫物也遣牛一人狩衣云々

此一級
宣被前
出ツ

又云正長二年四月廿日室町殿渡御京

門跡御車御狩衣也今度御事御元服以

後被任御佳例令成給也仍御狩衣御着

用よて他所へ成御始也三献之後御直

垂長被着替了

廿二 永祿五年日吉礼拜講記云十月廿日狩衣被法持身

樹下和欲所被衣もつき此後織物所紋桐唐草裏

七キ腰带包袖くり平打ハハ五寸許紫ノ段

此法持身也唐紫所紋多クキ裏花七キ友腰スソハ冬リ

白丸打山門奉行代登同通仕何公御廣蓋居て渡也

廿三 花宮三代記云應永廿八年正月一日乙

丑御方御所様御直垂御地白御紋桐緋

黄三鳥帽子御狩衣也佳例也御立

廿三 續武家閑話云柳原康政上洛キめク是公奉書密被

旅着に來臨忠臣のノ一ノ貴キヤラ是相成白福尼ニ時

ハ若頼朝此書被衣ニ立馬帽子ト是事一息有キ

面白くそれにて封面を之の左極に可存より極に
寫すて是より臨ひ明日の御供へけきいたるは右
此書抄の立烏帽子にて封紙をうらむるは云々
十四 宗五方双紙云々此時心持より時よりうてかり
きぬ方かゝりうう打こきをり以中二三日前に
元もん哉字うて又をきりてきりては日よ志
ありとしく能は

廿一 装束大躰畧云武家狩衣之具指貫狩衣

腰帶 烏帽子 少刀 緒 太末 廣

按狩衣者即布衣也其と尚糸よいつるごとく紋も色も
定まり法なり一色一裏あり其の物より此類を用
ぬる色目一裏表此如く此色をもて稱し此稱ある
あり

二 保元物語云あり此をうてんもとよま三有より

して字源標をく思ふ志より御海と此あるをみる
むありそあり海をうては法性香一のあり此邊

にして中納言此のめくくすとねりて申甲此
玄廿騎ハウリヨウチ河内由紀ありとも三原
騎を一人ヨクシク申すてしちてあてはちうと云
厚くう白書此物衣ヨク系あくと此よりひきくろ
此よりく移くくその川たうと云

十八 満濟准后記云正長二年九月十六日今
日室町殿様日吉御参詣御加持ニ参畢
云ニ於御會所御加持有之御符衣唐織物

御着用以後御加持也

四 平家物語訓注云三親政位入道此より此のさき

いづれと云ふの原とて起口きりあといふものあり中略
ひやうらんのかくちぬのきくとちあふきうふ
うりにちうたいのきせちちうひをとて此よりひき
りてあふれうを此とてしめいり相法に呈れと云を
あきく云々

十九 西三條装束抄云褐衣隨身ノ着スル物

ナリ狩衣ノ脇ヲ丁ガキタル物ナリ着

用事可依先規

廿四 按古代古礼容を考ふるに其風俗なる故甲冑此下に

も於袴衣水干並垂糸を考ふるに其風俗なる考ふるに

ハ考此袴衣も其競ハ大らうと菊綴ハ考即考

出古三十六奇仙生忠んく考ふるに袴衣の類考ふる

ハ袴衣も其干も裁縫や相似く軍陣も其便なる考ふるに

袴衣並糸ハ其の由来考ふるに其風俗下は考ふるにハ考ふるに

温古字袴本ニハ
此圖布狩衣ノ條(毘布
衣記云)下ニ出リ

禮



ナリ狩衣ノ脇ヲ下ニキタル物ナリ着
用事可依先規

廿四

按古代之礼容を考ふるに其風俗なる故甲冑此下に
も袴袴衣水干並無きを考ふるに其風俗なる考ふるに
公卿ノ衣此袴衣より競ハ大らうに菊綴したり即ち
出古三十六奇仙在生忠んく考ふるに袴衣の類考ふる
一ノ袴衣も亦干も裁縫や相似く軍儀に用ふる所も亦
禮重なるに其の由来よりなる履下には履下ハ考ふる



布狩衣

吾妻鏡云建保六年五月五日乙亥義時相州

被申依召被参御所洛中事被尋仰之云

先去月十四日初参御鞠庭著布衣顯文紗狩

衣白指貫伴愚息二郎時村藍布狩袴公卿候

箕子上皇上一御簾殿覽之云

按布衣記五位の狩衣の事上京北字洛さうし此

布より白く糸を付て一重狩衣なり二位の狩衣

中表仁和寺布好有りうらゝ練具と付之付色ハ至此年

より又六位の色よりなるなり凡えうら若ハ布衣と

と狩衣といひて後世布衣に限る布衣と称

志又追以布衣地とて練緯を用る事となり

襖

今昔物語平維茂罰藤原諸任語云餘五

出立トテ略今日夕ニ不為テハ何ヲ可

期キソ命惜カラム者ハ速ニ可留シト

二十五

訓注

日前ノ四此ハル可シ

云テ我ハ紺ノ襖ニ款冬ノ衣ヲ着テ夏
毛ノ行騰ヲ履綾蘭笠ヲ著テ征箭州許
上指馬胯ニ並指タル胡篋ヲ肩テ云ニ

⁺中右記云寛治八年三月八日己卯今日隆秀書義經胡

臣隨身隨人并改入法中義經胡着鞠塵襖襦袴款

冬衣無恙多額白部亦二百人許立甲雲連白刃日趨云

吾專鏡云建長四年十一月十一日辛卯

申剋將軍家新御移徒也云ニ奧州相州重時時頼

布豫被參候佐々木大夫判官氏信布佐

佐木隱岐判官泰清白候南門内東西脇

大田康有記云建治三年六月十九日晴

城九郎判官今日始着白襖出仕云ニ

按和名抄ノ唐合云諸給時彼等則白襖子一領襦者

爲老夏襖阿字之とあり唐ノ阿字と云ふ衣彼合武

友此後ノ位襖紺縹襖亦ありて義解ノ謂多襖ノ衣

也といふ又延喜式ノ大儀中儀ノ近衛ハ緑襖門部

此は源頼朝の撰此は後衣をいふ所なりと云く
ぬの中たるは色ハ赤と青と也素此久しくなるぬを
ハ極めあをハさそを布るらんたると見えたる襦ハ
即布衣あると知るハ一は襦織襦白襦比金襴虫
襦ホの者目あり又素と襦と別ありハ素とを
互に假借して書すと儲去り多かり生文ハ陰ハ
其案を各ハハ一胡曹抄ハ白襦水色とあり装束
雜事抄ハ色ある布衣ハ對ハハ志ハ何と云ハ

半尺水色ハ極て薄く素を帯ハる色あるは其後
是も同ト如く襦と云ハ案ハ異なりハ也

狩襦

法躰装束抄云狩襦事 袖括 袴衣 神給 同 前 裏 あり 上下とあり 又 単 也 あり

赤布ハ相なり織物色ハ具等ハ衣ハ同ハ練生時
節色時ハ多クハ厚ハぬハ粗上と細ハ衣ハ同ハ下
ハ淨衣ハ袴ハありハ下袴又身ハ力括も同前帯ハ
袴衣ハありハ帯用ハ淨衣ハありハ俗ハ帯用ハ

有例奉形移衣并移禊の色之下具昔應永二年九月
 月室町教法至戒之時乃忌記之委細注之
 按移禊といふは移衣上下此は之名目抄に移禊隨身
 亦着て舎人牛飼所用又此等之法而又号移衣施
 志華葉多し移禊奉ちあをよひと見え多し文全
 移禊ハ赤糸されず移禊といふ禊といふは移衣といふと同一
 一物ありし一多平車無き禊ホハ皆此等の類なり
 出るおと見え多しその糸はにいへし

半尻

建内記云永享十二年正月十日甲寅次
 参第一若君御方當年自元日御對面始
 也仍今日外様人ニ関白已下悉御對面
 也地紅梅文色御半尻令着之給
 又云嘉吉元年十月廿四日丁巳御移徙
 参賀可為明旦哉有其沙汰云云廿五日
 戊午参室町殿中略見参祝着々々白襖浮

織物御半尻令着給也

未按半尻古切衣此より此三尺五寸短手

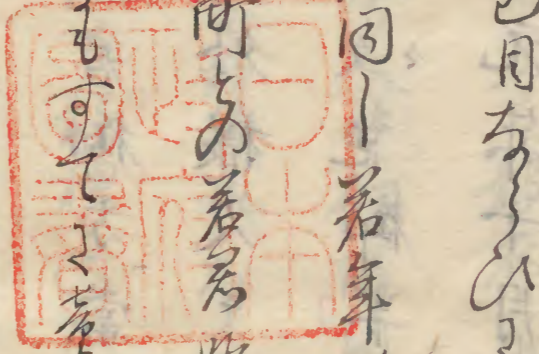
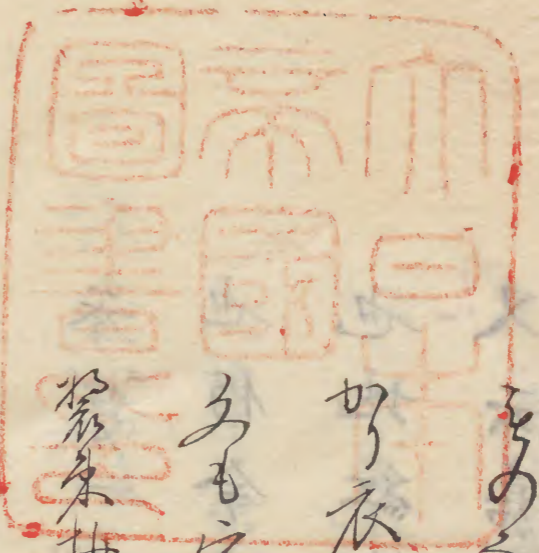
その之色目なるは用時古衣之帯亦なる

切衣に同じ若年此時着用の物建内記の

ふも室町との着方始末對面之時とある法條

袋束抄にもすては装束の所をこれをものをも

武家名目抄稿卷六冊



半及掛半尻又半裾の字を用ふ様衣乃より一紙の

短きものなるを裏あり又單なるとあり

御台十一半一月

田舎前跡
興田五志

武家名目抄稿卷六冊

海濱御目抄

明治十一年十二月

奥田正志
白倉清和 校

明治十五年六月五日旧稿校正

志村貞廣

同年六月十日再校花書

北川良忠

同年同月十一日以旧稿校正加朱點了

數原尚樹

明治十六年三月

再校

鈴木行一



